新時代に対応した高等学校改革推進事業
（普通科改革支援事業）

2024 年度（令和６年度）第 1 年次　実施報告書

島根県立津和野高等学校

目次

ページ

巻頭言　地域と連携した教育改革の実践　　校長　松田哉…… １

本報告書の構成…… ２

Ⅰ　事業の概要（令和５年度末　申請時）…… ３
　ⅰ　新学科を設置する学校名および設置年度
　ⅱ　申請時以前の本校における教育実践の概要と展望
　ⅲ　新学科設置の必要性
　ⅳ　新学科設置の目的・目標
　ⅴ　運営指導委員会の体制および取組内容
　ⅵ　コンソーシアムの体制および関係機関との連携方法
　ⅶ　特色あるカリキュラムの内容について

Ⅱ　本年度の成果報告……１１
　ⅰ　新学科名およびグランドデザイン策定のための取組
　ⅱ　各組織の取組
　ⅲ　授業改善への取組
　ⅳ　地域と連携した探究活動への取組
　ⅴ　情報活用能力育成のための取組
　ⅵ　新学科の広報活動についての取組
　ⅶ　他校等との連携についての取組

Ⅲ　令和７年度に向けて……６６
　ⅰ　成果と課題
　ⅱ　今後に向けた構想

＜資料＞……６７
　申請前の構想図／申請時の構想図
　学校説明資料
　新学科説明用リーフレット（６月作成）
　島根県立津和野高等学校令和７年度グランドデザイン
　地元向け説明会新学科説明資料
　普通科改革と学校設定科目についての校内説明資料
　島根県立津和野高等学校令和７年度入学生教育課程表
　連携体制について
　「授業力向上プロジェクト事業」授業案

巻頭言

地域と連携した教育改革の実践

校長　松田　哉

世界はグローバル化とデジタル化の波に乗り、経済、文化、情報が国境を越えて融合する一方で、国家間の対立、格差の拡大、気候変動といった地球規模の課題に直面しています。デジタル技術の進化は、私たちの生活を豊かにする可能性を秘める反面、サイバーセキュリティ、個人情報保護、情報格差、SNS を介した犯罪など、新たな課題をもたらしています。

日本国内においても、少子高齢化、労働力不足、地方の過疎化といった課題が深刻化し、国際競争力の低下が懸念されています。デジタル化の遅れは、行政や企業の DX 推進を阻み、社会全体の変革を遅らせています。

このような国内外の大きなうねりの中、津和野町は 2050 年に人口が半減するという厳しい予測に直面しています。町内唯一の高等学校である津和野高校も、生徒数の減少という危機に瀕しており、学校の存続に関わる重要な局面を迎えています。

しかし、津和野高校は、この困難な状況を打破すべく、様々な取り組みを積極的に推進してきました。地域と連携した探究学習「T-Plan」の推進、県外からの生徒を呼び込む「しまね留学」への参加、ICT 活用による教育のデジタル化、主体的で対話的な協調学習の実践による教育の質の向上、そして少人数指導と個別指導によるきめ細かなキャリア支援。これらの取り組みは、生徒たちの可能性を拓き、地域社会の未来を担う人材を育成するための重要な一歩です。

そして今年度、本校は文部科学省より普通科改革支援事業と DX ハイスクール事業の二つの研究指定を受け、普通科改革への第一歩を踏み出しました。令和 7 年度入学生からは学科名を「未来共創科」に転換します。「未来共創」とは、多様な関係者と協働して未来社会の創造に主体的に挑戦していくことです。本校は、津和野町や誘致企業と協働し、社会課題の解決に貢献できる人材育成のための教育課程編成を目指します。カリキュラムの 4 つの柱として、「教科学習」「探究学習」「情報活用」「特別活動等」を掲げ、全ての教育活動の中で「情報活用能力」を育成するとともに、その情報活用能力を生かして教科学習や探究学習の深化を目指し、課題発見力や粘り強い課題解決力を育成していきます。

津和野町もまた、IT 産業の振興による雇用創出を掲げ、町の活性化を目指しています。津和野高校の普通科改革は、このような町の総合戦略と軌を一にするものであり、両者が連携することで、デジタル社会で活躍できる人材の育成という共通の目標に向かって進むことができると確信しています。

本報告書では、津和野高校が地域の産学官民と協働して推し進めた教育改革の取り組みを記録しています。この研究が、人口減少の課題に立ち向かう高校や市町村が未来を切り拓いていく一助となることを願い、巻頭言といたします。

本報告書の構成

「Ⅰ　事業の概要」では本事業の概要について、令和５年度申請時のものを示した。

「Ⅱ　本年度の成果報告」では、令和６年度の事業の取組内容と成果を示した。あわせて申請時の構想を、本年度１年間で具体化していった過程について記述している。主に具体化できた点については、以下の点である。

・新学科で育てたい生徒像を資質能力ベースで明確にしたこと
・地域や企業との連携体制を確立したこと
・学校設定科目についての協議をスタートし、カリキュラムの大枠を作成したこと
・具体化したことをもとに、実際の教育活動を試みたこと

「Ⅲ　令和７年度に向けて」では、令和７年度に向けて今年度の成果と課題を整理し、次年度の構想を示した。

巻末に参考資料として、事業全体や組織の構成図、各説明会資料、グランドデザイン、教育課程、実施した授業案を収録した。

企業や行政の方と本校が一体となって、未来共創科の学びを具現化していった過程についてご確認いただきたい。

Ⅰ　事業の概要（令和５年度末　申請時）

ⅰ　新学科を設置する学校名および設置年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 （ふりがな）	学科の種類	設置年度
公立	**島根県立津和野高等学校** **（しまねけんりつつわのこうとうがっこう）**	**その他普通科**	**令和７年度**

ⅱ　申請時以前の本校における教育実践の概要と展望

少子化や過疎化により生徒数が減少する中で、島根県が推進している「しまね留学」に当初から参加し、県外からの生徒も積極的に受け入れた。また、地域とのつながりも重視し、魅力化コーディネーターにも積極的に教育活動に関わる仕組みを整えた。様々な人と共に学ぶことで、多様な価値観を認める土壌を作り上げた。そして、多様な新しい時代に対応するために、以下のような取り組みを行ってきた。平成３１年度から令和３年度まで、島根県教育委員会の「主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善事業」において、「研究拠点校」として県内２校のうちの１校に指定された。この事業においては、東京大学 CoREF（現 一般社団法人教育環境デザイン研究所 CoREF 部門）の協力の下、本校在籍の研究推進教員を中心に「知識構成型ジグソー法」を用いた授業改善に取り組んだ。この事業を通して、建設的互換作用により授業中に生徒が対話を通して学びを深める方法について試行錯誤を繰り返し、校内に展開した。

この事業の後継事業である「授業力向上プロジェクト」（令和４年度から令和６年度まで）において、県教育委員会のマイスター認定を受けている本校教員が関与するほか、本年度は２名の若手教員が研究推進教員として協調学習の推進に取り組んでいる。

また、ICT を活用した学びについても先進的に取り組み、令和２年度から３年度まで島根県教育委員会の「ICT モデル校事業」において、「研究拠点校」として県内３校のうちの１校に指定された。この事業においては、合同会社 LINK ALL 様の助言を受けながら、「ICT 活用を通した生徒主体の学び」の実現を目指し、ICT を活用した効果的な学びについて研究を深めた。この結果、Google for Education の「事例校プログラム」に参加することができた。

さらに、中山間地域という地理的ハンディを克服し、多様な科目の学びを実現するために、文部科学省の「CORE ハイスクール・ネットワーク構想事業」に参加し、「石見オロチネットワーク」の一員として、遠隔授業の受信や配信を行った。

今までの取り組みの中で、多様な視点を持ち、対話的に深く学び、ICT を活用した校内を超えた学びが実現できるようになってきた。ただ、その中で、様々なものに目を向けることをはできても、実際何が課題であるかを把握する「客観的に課題発見する力」が生徒全体においてまだ不足していることが見えてきた。また、「課題解決に向けて粘り強く取り組む力」について、総合的な探究の時間や理数科目の学習などにおいてその力を身に付けつつある生徒はいるが、学校全体でみるとまだその力を身に付けることのできない生徒がいることも分かってきた。これらの力は、VUCA 時代を生きる生徒にとって必要不可欠な力であり、それらを身に着けさせることが本校の次の課題である。

そのような中、津和野町において IT を中心とした企業の進出があり、本校の教育への協力体制が構築されることとなった。その企業が持っている「データサイエンス」などのノウハウを活用し、データ分析と課題発見についての授業を学校全体に展開し

たい。また、プログラミング技術についても援助を受け、プログラミングをして実際の物体を動かす試行錯誤をすることで、粘り強く課題解決に取り組む力を身に付けるプログラムを作り、その力を身に付ける選択肢を増やしたいと考えている。また、地理的ハンディのある津和野町においては、ICT の活用は地域活性化のためには不可欠である。最終的には地域に戻り、IT 人材として地元で活躍する人を育成するために、専門分野の基礎的な内容が学べる科目も開設する。

ⅲ　新学科設置の必要性

津和野高校（以下、本校という）が位置する島根県津和野町は、令和 5 年 12 月に厚生労働省の国立社会保障・人口問題研究所が公表した 2050 年の地域別将来推計人口によると島根県内市町村で 2020 年比の減少率が 53.2%と最も高くなる見通しである。津和野町内の児童生徒数は今後 40 人前後で推移し、小中学校の一層の小規模化は町内唯一の高校の維持を困難にし、ひいては町の持続可能性を左右しかねない。本校の入学定員は 2000 年代半ばの 5 年間で半減して 2 学級 80 人となり現在に至っており、数年に一度の頻度で定員を満たすことはあるが、定員割れが常態化している。

このような人口問題をはじめ課題が山積する中山間地域であるが、小規模高校だからこそ提供できる教育の魅力もある。そこで、2011 年度からしまね留学を高校魅力化事業の一環として取り入れ、全国から入学してくる生徒により多様性に富んだ生徒集団が形成されている。令和 5 年度現在で島根県外生の割合は 40.5%を占め、親元を離れて寄宿舎や下宿で生活する生徒も 45.1%と、育った文化的背景も生活背景も実に多様である。恵まれた自然環境と田舎故に温存された文化や人間関係が、都会育ちの生徒の感性を刺激し、地元の生徒との間で引き起こされる“化学”反応の熱量で町に活気が生まれる。探究学習や放課後の時間を使った課題解決型の活動では、高校魅力化コーディネーターなど教員以外の大人の力も借りながら、学校から地域社会に飛び出していく。高校の方針を「“やってみたい”を“やってみる”にする学校」として打ち出し、生徒の挑戦を学校と地域社会で応援する気風が定着して 10 年が過ぎた。

しかし、課題の設定や探究の進め方、深め方には工夫する余地があることも事実である。ICT 機器を活用することで新しい展開が見えてくるのではないか、そのように考えて本校もこの 5 年の間に島根県教育委員会の「ICT モデル校事業」や「CORE ハイスクール・ネットワーク構想事業」の研究指定校として率先して取り組んできており、校務の DX 化は県内で先頭を切っていると自負しているが、それによって課題解決型の学習がどこまで深まっているかといえば、まだ緒に就いたばかりである。

一方、津和野町も現行総合戦略（令和 2 年度～6 年度）の中で少子高齢化と人口減少にふれ、基本目標 1「定住の基盤となるしごとをつくる」の筆頭に「IT 産業を軸とした雇用を創出する」ことをあげており、「高校新卒者あるいは UI ターン者を中心に ICT 技術を習得する機会をつくり」、「誘致企業に人材を供給するための“人材育成の場”の充実」を図ることとしている。近く新たに 5 社目の IT 企業誘致も実現する。高校の教育現場における普通科改革が、町の総合戦略と軌を一にすることで相乗効果を発揮する可能性を感じている。高校の新教育課程で教科「情報」が必須となったこともあり、実践的なデジタル思考や活用を身に付ける環境が津和野の町と高校の間で整いつつある。デジタル社会に適応する人材を養成するという時代の要請に合致した新しい普通科へ転換することは、自然かつ必然の流れだという結論に至った。

ⅳ　新学科設置の目的・目標

津和野町唯一の高等学校として、町内のあらゆる生徒を受け入れると同時に、全国各地から本校に興味を持った生徒を受け入れる本校において、入学した生徒を誰一人残さずこれからの時代に対応できる人材として育てる使命がある。また、将来の地域を支える人材育成の場としても期待されている。

多様な背景を持っている「生徒全員」が、これまで地域と関わり地域について学んできた知識を活用し、地域活性化のための課題について仮説を立て、それに基づいたデータを収集、分析、解釈することで客観的かつ具体的に地域活性化の手がかりを提案できる能力を身に付けることを第１の目標としたい。例えば、地域でのアンケートやヒアリングで得たデータや RESAS のデータを分析して解釈することで課題の発見に客観性と具体性が備わる。そして、それらを分かりやすく地元の方に伝える能力を身につけることで、具体的課題の共有ができる能力を身に着けさせたい。

そして発見した課題の解決に「粘り強く」取り組める生徒を育てることが第２の目標である。協調学習の取り組みによって、１人では解決できないような課題を他者と協同的に解決するスキルを身に着けてきた。また、ICT モデル校事業を通して、いち早く生徒が ICT 機器を活用するスキルを高めてきた。これらの基盤を活用し、例えば、プログラミングの結果で現れた不具合をどのように改善につなげたりするかといった試行錯誤を経験させ、粘り強さを自然と身に付けさせたい。

さらに中山間地域という地理的ハンディがある津和野町にとって、IT　技術はそれを克服する切り札であることから、津和野町の総合戦略では IT 企業の誘致が定住の基盤となるしごと創出の筆頭に掲げられている。過疎化が進み、交通基盤が脆弱であるなどといった社会インフラの問題解決や地場産業創出のために IT 技術が期待されている。同時に、地域の問題解決のために地元の課題を具体的に分かりやすく提示できる、データを活用する人材が求められている。これらの期待に応じられる人材となるための素養を、生徒に身に着けさせることが第３の目標である。

この目標を達成するために、新しい学校設定科目を設け、今まで培ってきた普通科教育の上に必要なスキルを身につけるためのプログラムを、地元 IT 企業と協力しながら進めていきたい。この取り組みを通して出来上がった本校生徒と地元企業との繋がりを生徒が卒業した後も IT 技術を活用して維持できるような体制を整え、地元津和野町への人の回帰の流れをつくりたい。

ｖ　運営指導委員会の体制および取組内容

１　運営指導委員

所属	氏名	主な実績
一般社団法人教育環境デザイン研究所	飯窪真也 （委員長）	主任研究員
合同会社 LINK ALL	金澤　浩	島根県教育委員会 ICT モデル校事業アドバイザー
株式会社さとくらし	桜井里子	代表取締役
学校法人東明館学園	神野元基	理事長、校長、中央教育審議会臨時委員（2019～）

２　取組内容

〇学校設定科目の開発に関する指導助言
〇総合的な探究の時間への成果波及のための指導助言
〇事業の進捗と成果の検証
〇その他、新学科の設置全般に関する指導助言

vi　コンソーシアムの体制および関係機関との連携方法

１　コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
島根県教育委員会	木原和典	教育監
津和野町教育委員会	岩本要二	教育長
津和野町役場つわの暮らし推進課	宮内秀和	課長
津和野町役場つわの暮らし推進課	豊田悠策	企業誘致担当
津和野町教育委員会	楠　　寛	高校支援（高校魅力化事業）
津和野町ＩＣＴ教育 推進検討委員会	小田充男	副委員長、 津和野町立日原中学校長
株式会社さとくらし	桜井里子	代表取締役
株式会社タイムカプセル	相澤謙一郎	代表取締役
一般財団法人つわの学びみらい	牛木　力	山形市社会教育委員、山形県新庄・最上ジモト大学ｺﾝｿｰｼｱﾑｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ
津和野高等学校	松田　哉	校長
コーディネーター	宮本善行	教育魅力化、元津和野高校校長

２　関係機関との連携方法

津和野町の誘致 IT 企業、一般財団法人つわの学びみらい、企業誘致に係る行政担当部署、教育にかかわる担当部署により連携、協働するコンソーシアム体制を構築し、事業全般、学校設定科目カリキュラム、総合的な探究の時間の内容について、計画・立案していく。また、事業成果についても検討を加える。

誘致企業が DX 人材育成にかかる講師陣（アドバイザー）として協力することに前向きな意向を示している。プログラミング系、マーケティング系それぞれ特徴を持つ誘致 IT 企業であり、各企業は社会貢献に積極的で、既に町内小中学校においてプログラミング講座や情報モラル講座を実施するなど、ノウハウも持ち教育や人材育成の面での実績もある。

一般財団法人つわの学びみらいは、本校に配置されている教育魅力化コーディネーターを統括しており、本校が１０年間積み上げてきた課題解決型学習の授業設計や総合的な探究の時間におけるカリキュラム作成を行い、授業にも参画して成果をあげている。また、企業や住民とのハブ的機能を果たして地域に根差した高校にも寄与している。

本校は Google for Education 事例校として課程内外での IT 端末の日常的な活用が既に浸透している基盤がある。本事業では専門性を持った地域企業人材を講師として招き、プログラミングからマーケティングまでデジタル領域を幅広く学ぶ。デザイン思考とロジカル思考の両方を身に付けたデジタル人材を育成するという目標に向けて、コンソーシアム構成員のそれぞれの強みを融合させ、実践的かつ先進的な教育プログラムが立案できる体制とする。

vii　特色あるカリキュラムの内容について

現在ある 3 つのコースを維持し、「総合コース」には課題発見と粘り強く課題解決する力を育む科目、「探究コース」には課題発見の科目、「自然科学コース」には課題発見と IT 分野への興味関心を高める新しい学校設定科目を開設し、全生徒が目標を達成できるようにそれぞれのコースの特徴に応じた教育内容とする。

はじめに「総合コース」においては、2 年次に必履修「情報活用」を開設する。外部講師の援助を受けながらビッグデータの収集の仕方やデータ分析の方法について学ぶ。理論を学んだ後に、地域の課題解決といった実際の場面において RESAS などのデータ分析と課題発見に取り組む。想定している内容は、本校生徒の身近な課題から地域社会の抱える課題まで生徒が関心を抱いた課題であるが、例えば高校の魅力を中学生に発信する内容である。web デザインについても同時に学習をする。これらを踏まえ、データ分析をもとにインターネットなどの媒体を用いてオープンスクール等で実際に中学生に学校を紹介し、そこから収集された参加者アンケートなどのデータを分析して次の課題を発見して課題克服に取り組む。こうしてデータに基づいた具体的な課題発見の力を育む。そして、地元 IT 企業等に数日間のインターンシップを行い、現場におけるビッグデータ活用について学ぶ。また、3 年次に選択科目「プログラミング応用」を開設する。外部講師の援助を受けながら個人端末を用い、iOS アプリのプログラミングを学ぶ他、アプリ開発の企画、デザイン、IT ビジネススキルを身につける。実際のアプリを動かす中で試行錯誤を繰り返しながら、粘り強く目標に向かって取り組む力を育成する。

続けて、「探究コース」と「自然科学コース」においては、3 年次に必履修科目「データサイエンス実践」を開設する。この科目においては、外部講師の援助を受けながら実際のビッグデータを分析し、課題の発見や傾向の解明に取り組む実践をする。この学習を通して、2 年次に総合的な探究の時間や理数科目の中で取り組んできた自分自身の課題発見方法についてもう一度見直し、卒業後上級学校等での実践に役立つノウハウを習得することを目的とする。

この他「自然科学コース」においては、理系四年制大学に進学する生徒も多いため、情報系学部やプログラミングへの興味関心を高めるために、2 年次に必履修科目「プログラミング発展」を開設する。具体的な進路志望を定める時期となる 2 年次に、プログラミングでロボットを動かし、評価と改善を繰り返しながらプログラミングの面白さやその必要性について学ぶ。これにより IT 技術への興味関心を高めたい。

また、全授業においてハイブリッド授業が実施できるようにするための保有機材等の活用や、各教員への研修を進めていく。

教育課程外にはなるが、本校にある地域系部活動「グローカル・ラボ」に、プログラミングができる領域を設立し、地元 IT 企業と連携しながら、プログラミングに興味を持った生徒が 1 年次から積極的に学べるような体制を整える。

Ⅱ　本年度の成果報告

ⅰ　新学科名およびグランドデザイン策定のための取組

新学科の設置にあたり、新学科名の決定と新しいグランドデザインの作成を令和６年５月下旬から行った。グランドデザインについては SWOT 分析を用い、本校の教育の強さと弱さについて各教員が分析し、その中で育てたい資質能力を検討した。それをもとに教科学習・探究学習・情報活用の３つの柱を通し、１０年後の社会状況を見据えながらどのような力をつけさせるかを考えた。地域に一校の普通科の使命として ICT 人材の育成に限らずこれからの複雑な社会を幸福に生きていくために必要な資質・能力をすべての生徒に育てるという観点も加味し、５領域１５の身に着けさせたい力を定めた。また新学科名については、新しいカリキュラムに即したものであること、津和野らしいものであること、２０年後も残るものにすることを留意し、検討を進めた。本校教員から新学科名を公募し、投票することで候補５つに絞った。その上で、本校生徒や地元中学校生徒、および地域有力者にも投票を依頼し、その結果をもとに「未来共創科」を校内の案とすることとした。この結果を７月に行われた第１回運営指導委員会にて諮り、最終的に島根県教育委員会に承認され、９月９日、「未来共創科」への学科転換が決まった。

R060520 運営委員会

令和7年度グランドデザイン作成及び新しい普通科の学科名検討について

校長　松田　哉

1．経緯

令和７年度入学生を対象に二つの新しい文部科学省の事業指定を受けて教育改革を進めていくことになった。それに伴い、普通科の枠組みの中で新学科を設置し、グラデュエーションポリシー・カリキュラムポリシー・アドミッションポリシーを明確化して新しいグランドデザインを示す必要がある。

2．作成方針

① グラデュエーションポリシーとアドミッションポリシーはこれまでのものをほぼ踏襲する。

② カリキュラムポリシーについては「やってみたい」を「やってみる」３コース（総合・探究・自然科学）は変更せず、新しい学校設定科目をそれぞれのコースの特性に合わせて設置する（すでに申請済み）。

③ 教科学習・探究学習・情報活用の三本柱を通して『どのような資質・能力』を育てたいかを明確化したい。その際、現在の社会状況だけでなく１０年後の社会状況も想像しながら必要な資質・能力を考えたい。また、記憶に残りやすいものにするために、言葉は単語とし、シンプルな「～カ」や「～性」などとしたい。例えば、「主体性」「忍耐力」のような言葉である。

＊R6＝「各教科の知識・技能」・「社会人としての常識・判断力」
「国内外の状況を把握する広い視野」
「自他の心と身体の健康を大切にする姿勢」

④ 学科名は、中学生やその保護者、地域の人々など学校外の人々に好印象を与え、かつ、改革にふさわしく、津和野高校が進んで行く方向性が表れているものにし、２０年後も残るものにしたい。

⑤ グランドデザインと学科名のどちらにも「津和野らしさ」を大切にしたい。できればグランドデザインにはストーリー性が欲しい。

3．作成手順

① SWOT 分析の手法を活用し、津和野高校の強み・弱みを考える中で、育てたい資質・能力について検討する。ただし、会議を開催する時間的余裕がないので、フォームを活用したアンケートにより、アイディアを収集する。

② 学科名については、条件をつけすぎるとアイディアが出てこないので、ブレーンストーミング法で自由に楽しく案を検討する。まずは、教職員とコーディネーターにフォームでアンケートを実施する。

③ 校長は出てきた案を整理・分析し、原案を作成し、運営委員会に提案する。

4．スケジュール

５月２０日（月）　運営委員会提案
　　２１日（火）　朝礼で説明・フォーム送信
　　２９日（水）　フォーム提出締め切り
６月１０日（月）　運営委員会提案
　　１２日（水）　職員会議提案
　　２８日（金）　グランドデザイン提出〆切

【会議資料】

【SWOT 分析結果集約】

生徒の強み

＊項目の後の数字は人数

- 素直さ４、純朴、他者のアドバイスに耳を傾ける素直さ、大らか、言われたことに取り組む、協調性
- 真面目、課題に真面目に取り組む、
- コミュニケーション力、やりとりすること、年齢関係なく初対面の方々との距離の詰め方が上手、礼儀正しい、傾聴力、共感力、
- 人懐っこいところ、人に甘える力、CNのバックアップも武器としている、地域活動に参加している生徒が多いので大人慣れしている、地域の方々など知り合いが多い、
- 多様性を受け入れる雰囲気、多様性（多様な背景）色々な背景を持っている人を尊重し受け入れること、受容すること、 教員の国公立大学一般入試押しに引きずられない多様な進路選択、個別最適
- やりたいことを見つけると，行動すること、やってみたいをやってみようとする力、積極的に地域の活動に参加する、やってみよう精神のある人が多い、地域と関わる力、教員頼らずとも自発的に行動できる、地域に出て行こうとする意欲、地域活動を積極的に行っている、物おじしない、地元生もチャレンジしている人がわりといる、
- その他：発想が豊か、やりぬくこと、伸びやかさ、座学よりも実技に向いている人が多い、勉強第一ではなく人生第一で考えてもらえる、余白

生徒の弱み

- 基礎学力が定着していない生徒が多い、勉強しない、論理性不足、客観性不足、検討すること、他校との距離が離れているため，他校の様子がわからないため，SNSで流れてくる他県の高校（荒れたような様子）の情報を鵜呑みにする、進学に不安があるという先行イメージ、人の話を聞いて自分のこととして考える力、学力の差、頭脳プレーが苦手、社会システムを作る側になる野心を持てていないこと（作る側に踊らされている）、
- 諦めやすい、こだわって取り組み続けること、忍耐力の低さ、継続できない、継続する力、意味がないと感じたことに対して頑張れない、楽な方へ流される、鍛錬不足、暗記力、「一夜漬け」（テストに限らず、「積み重ねていって勝負」が苦手）、しっかり学習することが苦手、予定を立てるのが下手、
- SST（ソーシャルスキルトレーニング）不足、外に一歩踏み出したり外で表現すること、話し合うこと（やりとりはできる）、
- 自分本位、自己主張、規律を守れない、想像すること
- まだまだ主体性が弱い、自信がない２、大人しい、

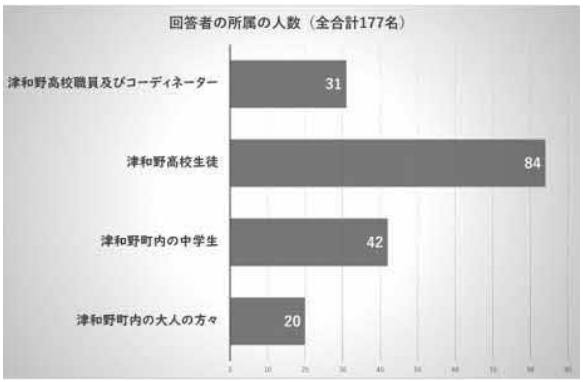
外部環境の強み

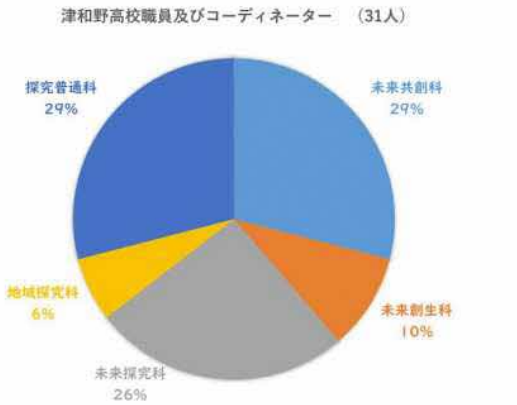
- ＣＮ２、役場の支援５、町民の支援６、地域活動、公民館２、日原自然の会，日原HANKOH，
- UIターンしてきた住民（異能者がたくさん）、地域みらい留学、県外からの注目多様なひとの手厚い関わり、楽しんでいる大人たちが多い、
- 観光資源３、外国人観光客、農業、林業、サービス業、町内の事業者や企業、様々な経験をさせられる
- 豊かな自然、田舎、まちのサイズ、周囲の環境が落ち着いていること課題先進地域であること、解決したい課題がそこら中にあること
- 小中学校が近くにあること、大学２（山大・県大）
- 卒業生、卒業生が帰ってきている＝ここ数年のツコウイズムが継承できる可能性がある
- 町バス、JR
- 新祭２
- すぐれた芸術
- 山口が近い

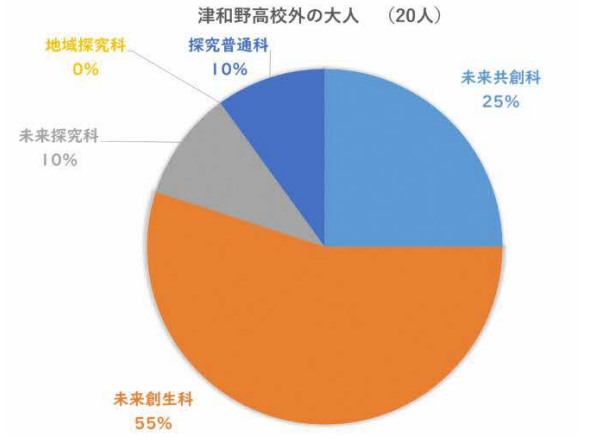
外部環境の弱み

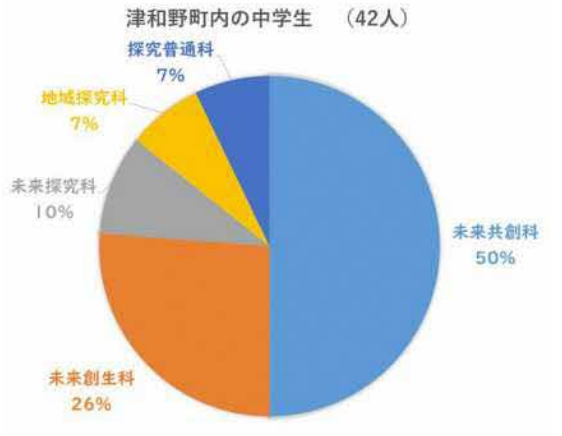
- 公共交通機関の利便性２、JR４、路線バス
- 田舎、地域活動、何があるか可視化されていないこと、選択肢が少ない
- 大学（連携活動前に十分な協議がないと生徒にネガティブな印象が残る可能性あり）、大学生がいないので競争心や将来のロールモデルが少ない、
- ライバル校（魅力化校）が県内外を問わず増えていること、地域みらい留学を受け入れる学校の１つという認識にとどまっていること、他の高校生徒の交流が少ない、部活動や学生イベントで山口県の大会への参加機会が無いこと、周囲にライバル校がない、
- クラスメイトが少ない、ある程度の人数がいないと成立しない行事や体験ができない、人口減少(少子化)
- 町民、地域住民の意識、地元での人気のなさ、津和野地区住民（の一部）の意識、町の中の唯一の高校であり存続の危機にあることを町民がどう思っているのか分からない、町が県外生を募集してでも存続を選んだのに県外生をに対するネガティブな考え
- 津和野地区以外（例えば日原）との関係が薄いこと、合併による地域バランス、
- 人事異動の動きが大きく様々な事柄が積み上がりにくいこと、教職員の年齢構成、
- その他：一部保護者（無関心・放任）、HAN-KOHの現状

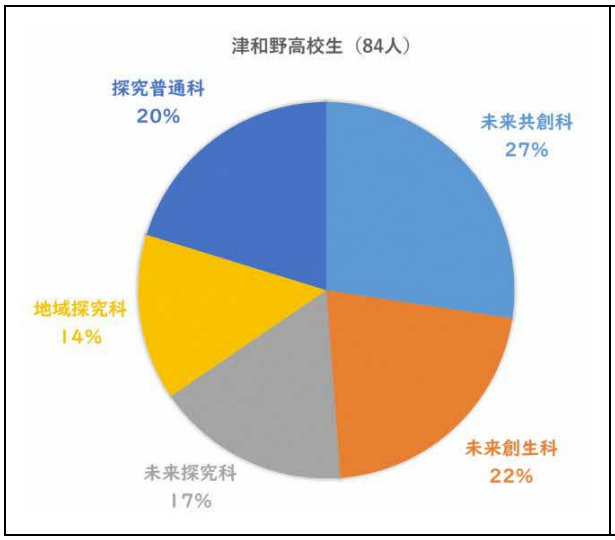
【新学科名アンケート結果集約】

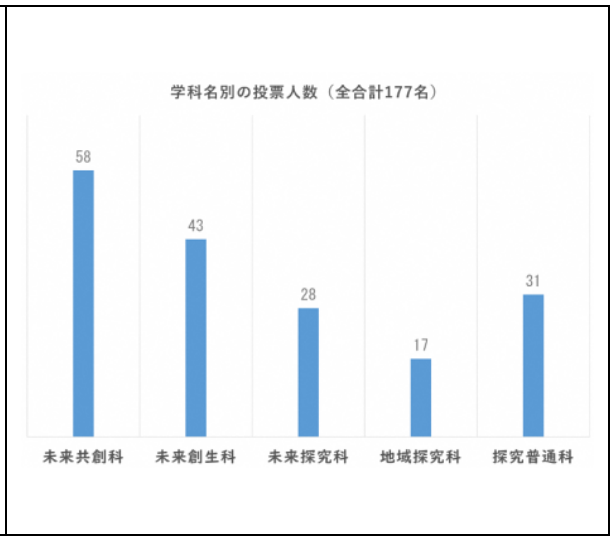









津和野高校生（84人）
探究普通科
20%
未来共創科
27%
地域探究科
14%
未来創生科
22%
未来探究科
17%


学科名別の投票人数（全合計177名）
58
43
28
17
31
未来共創科
未来創生科
未来探究科
地域探究科
探究普通科

ⅱ　各組織の取組

１　運営指導委員会

①第１回運営指導委員会

日時：令和６年７月１０日（水）１３：００～１４：００

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
一般社団法人教育環境デザイン研究所	主任研究員	飯　窪　真　也
合同会社 LINK ALL	カスタマーサクセス担当	金　澤　　浩
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
学校法人東明館学園	理事長	神　野　元　基
島根県教育委員会	教育監	木　原　和　典
	企画人事主事	樋　野　大　輔
津和野高等学校	校長	松　田　　哉
	教頭	石　原　寛　治
	主幹教諭	和　﨑　陽　子
	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	コーディネーター	宮　本　善　行

【内容】

・運営指導委員、コーディネーターに委嘱状を交付

会に先立って木原教育監が運営指導委員とコーディネーターに委嘱状を交付

・　グランドデザインについて

グランドデザインに「主体的～」とあるが、主体性と自主性の違いについての違いについて確認する必要があるという指摘を運営指導委員から受け、以下のように確認した。

自主性:他人が決めたことについてやるかやらないかを決めること

主体性:自分で決めたことについてやるかやらないかを決めること

・　新学科の名称について

アンケート結果集約の報告の後、運営指導委員より探究コースを存続させるなら学科名に「探究」が入ることはミスリードすることになる、つまり２年次から探究コースを選ぶ生徒だけが探究を重点的にやると捉えられる心配があるという指摘を受け、検討することとした。

・　新学科検討チーム会について

まだ本格的に動くことができていないという報告を受け、運営指導委員より外部連携をするときこそ教育理念等の目合わせが必要であり、自主性を育てて主体性を育てないことにならないようにしないといけないという指摘や、企業側にも育成したい人

材のプランがあるはずなので、目線合わせは必要という指摘を受け、検討することとした。

・ その他

グランドデザインに「世界で活躍する～」とあるが、協働する相手が近くの人ばかりだと多様性が育みにくく、全く考え方や文化の違う人と関わることが大切だという運営指導委員からの指摘を受け、検討することとした。

②第２回運営指導委員会

日時：令和６年１２月２３日（月）１３：００～１４：００

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
一般社団法人教育環境デザイン研究所	主任研究員	飯　窪　真　也
合同会社 LINK ALL	カスタマーサクセス担当	金　澤　　浩
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
学校法人東明館学園	理事長	神　野　元　基
島根県教育委員会	県立学校改革推進室長	吉　岡　　淳
	企画人事主事	樋　野　大　輔
津和野高等学校	校長	松　田　　哉
	教頭	石　原　寛　治
	主幹教諭	和　﨑　陽　子
	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	コーディネーター	宮　本　善　行

【内容】

・種子島中央高校訪問と企業との連携について

種子島中央高校で伺った内容の報告と、本校の今後の改革の進め方について報告があった。企業の方と連携をするためには、資金の確保が必要であることと、年次進行とともに学校側が担当する部分と企業の方にお願いする部分を適宜調整していく必要があるという指摘を受け、今後検討していくこととした。

・探究活動について

１年次に自分の取り組んでみたいことを探し、２年次に実際に取り組み、３年次に探究活動をもとに自分の進路について考える本校の探究活動であるT-PLANについて、本年度の取り組みの報告があった。地域の方の協力を得ながら探究活動ができている一方で、発表時における語彙不足、探究の根拠となる部分のデータが不足していることが課題として挙げられた。データサイエンスを活用することや、「誰のために」を意識しつつ探究活動を行うことが大切であるという指摘を受け、今後検討していくこととした。

・学校設定科目の検討状況について

各学校設定科目の枠組みを作り、そこからシラバスに落とし込んでいくところを今年度の作業として行うこととし、その枠組みの作成状況の報告があった。授業の中では、実際の企業で活用している事例を聞いた後に自分たちで実践を行い、その後に検証するプログラムをつくる方向であるという報告があった。成果発表会を行う予定にしており、プレスリリースを検討中であるということだった。運営指導委員からは、短期で行うプロジェクトのみならず長期で行うプロジェクトを探究活動と結びつけて行った方がよいという指摘や、学校と企業の強みを活かして授業改善につなげてほしいという指摘があり、今後検討していくこととした。

また、１年次に実施する「情報Ⅰ」における出前授業の実施を、島根県商工労働部産業振興課（以下産業振興課）と連携して実施するという報告もあった。

・その他

授業改善の方向性について議論し、教科の枠組みを越えて各学年でどのような力を身につけさせたいかを確認することや、合科授業の実施などの提案があった。

閉会のあいさつにて、校長より以下の３点について言及があった。

1)町内、県内、県外よりそれぞれ１／３の生徒が集まる本校にて、多様な人々と課題解決する人材を育成すること、そのために生徒だけでなく学校も新しい普通科の姿として開かれた教育課程の作成に取り組みたい

2)情報活用能力の意味は、教科、探究、課外活動が情報活用により深まることであり、全員の力を高めると同時に課外活動で尖った人材の育成に取り組みたい

3)事業終了後、教育委員会を越えて産業振興課等との連携をすすめ、新たな協働関係を築きたい

③第３回運営指導委員会

日時：令和７年２月２７日（木）１３：００～１４：００

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
一般社団法人教育環境デザイン研究所	主任研究員	飯　窪　真　也
合同会社 LINK ALL	カスタマーサクセス担当	金　澤　　浩
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
学校法人東明館学園	理事長	神　野　元　基
島根県教育委員会	県立学校改革推進室長	吉　岡　　淳
	企画人事主事	樋　野　大　輔
津和野高等学校	校長	松　田　　哉
	教頭	石　原　寛　治
	主幹教諭	和　﨑　陽　子
	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	コーディネーター	宮　本　善　行

【内容】
・令和６年度の取組報告および振り返り
　成果物（案）を参照しながら、第２回運営指導委員会以降の取組として行われた探究学習発表会やコンソーシアム会議、デジタル講座や、ホームページ更新作業の進捗状況、前回報告していなかった情報活用や広報活動への取組について普通科改革担当より報告があった。
　また、成果としては、グランドデザインの策定や学校設定科目の概要の作成、情報活用能力育成のための授業内外での試み、教科学習と探究学習の深化が挙げられるが、町内における広報活動や、校内への広がりについては課題が残ったという報告があった。
・令和７年度に向けて
　課題として挙がっていた町内への広報や校内への浸透については、改革の基盤となる部分がしっかりと定まらない状態で行うことが難しかったことも一つの要因と考えられる。学校設定科目を含め、その土台が固まってきたので次年度以降は公民館の催し物に出向くなど小さな機会を見つけて広報活動をしたり、具体的な教育活動の取組をさらに進めていく予定であると報告があった。教育活動としては、協力していただく関係先の方を講師として招き授業を行うこと、学校設定科目の詳細設計により多くの教員が関わること、意欲のある生徒に課外活動を中心に情報活用の取組を積極的に行わせることなどが挙がった。
　また、学校設定科目についても説明があった。各科目の単元および必要コマ数、担当企業について確認をした。
　運営指導委員より、取り組む内容は固まってきたが育てたい生徒像との関連についての具体的記述をすることや、評価の具体についてさらに検討を進めるべきであるという意見があり、今後検討することとした。また、学校設定科目や探究学習の中でプロジェクトそのものの成否よりもそれを通じて生徒がどんな力を身に着けるかが大切であるという意見もあり、検討を進めることとした。
　評価というものの捉え方について、校内研修をする必要があることが分かり、次年度実施に向けて検討することとした。
・その他
　閉会の挨拶にて、校長より以下の２点について言及があった。
　1)教科学習、探究学習、情報活用を通して生徒に身につけさせたい力については、改革推進部を中心に検討が進んでいること
　2)情報活用能力育成で身につけた力を教科学習や探究学習に活かす取組を、次年度はさらに進めていくこと

　会議後に、現在検討中である生徒に身につけさせたい力を測るためのルーブリックについて、運営指導委員に意見を伺った。

２　コンソーシアム会議等

①担当者会

日時：令和６年４月１６日（火）１６：３０～１７：１０

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
タイムカプセル株式会社	代表取締役	相　澤　謙一郎
津和野高等学校	教頭	石　原　寛　治
	主幹教諭	和　﨑　陽　子
	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	前校長	宮　島　忠　史
	コーディネーター	宮　本　善　行

【協議内容】

・普通科改革支援事業採択の報告と書類修正のための役割分担について

文部科学省への提出書類について意見がついたものについて修正の方向を確認し、役割分担を決定した。

・学校設定科目内容の設計について

桜井氏と山根教諭を中心に原案を取りまとめることとした。

・今後の連絡体制について

Google Chat を活用して連絡をすることとした。

②担当者会

日時：令和６年５月２日（木）１５：３０～１６：３０

会場：オンライン

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久

【協議内容】

・学校設定科目設計担当者について

学校側は、山根教諭および田原教諭であることを確認した。

・学校設定科目の検討する総授業時数について

２３３時間であることを確認した。

・今後の授業設計の進め方について

スプレッドシートを共有し、各時間の授業内容を５月中に入力していくこととした。

③担当者会

日時：令和６年５月１５日（水）１６：００～１７：００

会場：津和野高等学校

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
津和野町つわの暮らし推進課	課長	宮　内　秀　和
	企業誘致担当	豊　田　悠　策
津和野町教育委員会	次長補佐	楠　　寛
津和野高等学校	校長	松　田　　哉
	教頭	石　原　寛　治
	主幹教諭	和　﨑　陽　子
	普通科改革担当	山　根　幸　久
	主任主事	豊　田　和　宜

【協議内容】

・進捗状況の確認について

普通科改革支援事業および DX ハイスクール事業に採択されたこと、学校設定科目の内容について、桜井氏と山根教諭が具体的な協議を始めたことを確認した。

・予算措置について

普通科改革支援事業終了後に、企業との連携を続けるための予算措置について協議をした。非常勤講師の給料として支払う案も提示されたが、金額や制度の面から難しいとの指摘があった。各所で予算について検討することを確認した。

④担当者会

日時：令和６年６月２１日（金）１０：００～１１：３０

会場：津和野高等学校

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久

【協議内容】

・学校設定科目設計のスケジュール確認について

学校設定科目の授業が始まるのは令和８年度であることを確認し、令和６年度は各科目の基本設計を行い、令和７年度に各時間の具体設計を行うこととした。

・連携協議について

津和野町、高校、企業の３者で先進地である種子島中央高校を視察し、連携を模索することを決定した。高校側で先方との日程調整等を行うこととした。

⑤担当者会

日時：令和６年７月５日（金）１１：００～１２：００

会場：津和野高等学校

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
島根県商工労働部産業振興課	参事	平　田　聖　路
	係長	松　田　　敦
津和野高等学校	校長	松　田　　哉
	普通科改革担当	山　根　幸　久

【協議内容】

・連携について

普通科改革支援事業について、産業振興課と連携を進めることを確認した。１年次の情報Ｉにて支援を受けることとなった。また、産業振興課主催の IT 出前講座を本年度活用していくことを確認した。

⑥担当者会

日時：令和６年７月２４日（水）１５：３０～１６：３０

会場：津和野高等学校

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
津和野町つわの暮らし推進課	課長	宮　内　秀　和
	企業誘致担当	豊　田　悠　策
津和野町教育委員会	教育長	岩　本　要　二
	次長補佐	楠　　寛
津和野高等学校	校長	松　田　　哉
	教頭	石　原　寛　治
	普通科改革担当	山　根　幸　久
	コーディネーター	宮　本　善　行

【協議内容】

・進捗状況の確認について

運営指導委員会を７月１０日に行ったこと、学校設定科目の準備に向けたスケジュールを決定したことを報告した。

・予算措置について

普通科改革支援事業終了後に、企業との連携を続けるための予算措置について協議をした。今年度、学校設定科目を設計するために必要な費用は学校より支出することを確認した。各所で予算について継続して検討することを確認した。

⑦担当者会

日時：令和６年８月１日（木）９：００～１０：００

会場：オンライン

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久

【協議内容】

・学校設定科目について

当初の計画を変更し、データサイエンス系の科目を２年次、プログラミング系の科目を３年次に開設することを確認した。また、各科目の具体的な内容について協議した。

・種子島視察について

具体的な日程について協議した。

⑧担当者会

日時：令和６年８月７日（水）１６：００～１７：００

会場：津和野高等学校

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
島根県商工労働部産業振興課	室長	米　原　陽　介
	係長	松　田　　敦
	主任	千　原　洋　樹
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久

【協議内容】

・情報Ⅰでの連携について

情報セキュリティや、プログラムの開発過程（ユーザーとの打ち合わせ、設計、シミュレーション）について、本校情報科担当者より企業の方に仕事としてどのようなことをしておられるかを教えていただきたいという依頼内容を伝えた。

・IT パスポート受験について

産業振興課より、IT パスポート受験を促してほしいという依頼があり、校内にて検討することとした。

⑨担当者会

日時：令和６年９月１２日（水）１６：３０～１７：００

会場：津和野高等学校

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
津和野町つわの暮らし推進課	企業誘致担当	豊　田　悠　策
津和野町教育委員会	次長補佐	楠　　寛
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久

【協議内容】

・種子島視察について

日程の最終調整、役割分担等を確認した。

⑩担当者会

日時：令和６年９月３０日（月）１４：００～１７：００

会場：西之表市民会館

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
タイムカプセル株式会社	代表取締役	相　澤　謙一郎
株式会社 Nex-E	代表取締役	小　林　達　司
	取締役	熊　田　洋　子
バルトソフトウェア株式会社	シニアソフトエンジニア	大　石　和　也
津和野町つわの暮らし推進課	企業誘致担当	豊　田　悠　策
津和野町教育委員会	次長補佐	楠　　寛
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	コーディネーター	宮　本　善　行

【協議内容】

・普通科改革支援事業の取り組みについて

「津和野高校の取り組み」「グランドデザイン構想」「情報活用能力の育成」「学校設定科目について」本校担当者より説明をし、参加者から意見を募った。主な意見として以下のようなものがあった。

＜校外へ取り組みを広げることについて＞

−中高での連絡を行うこと

−高校生が中学生や地域のシニアに IT 機器の使い方について教える活動の実施

−放課後の活用

＜学校設定科目について＞
–データ分析について、例題を教室全体で取り組み、その後各自が活動する授業形態
–総合的な探究の時間との連携を模索
-Google Analytics を活用したデータ分析
-unity を活用したアプリ開発
-ブラウザベースでの開発
-スマートフォン用のアプリ開発

⑪担当者会
日時：令和６年１０月８日（火）１４：３０～１５：５０
会場：津和野高等学校
【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
津和野町つわの暮らし推進課	課長	宮　内　秀　和
	企業誘致担当	豊　田　悠　策
津和野町教育委員会	教育次長	山　本　博　之
	次長補佐	楠　　寛
津和野高等学校	校長	松　田　　哉
	教頭	石　原　寛　治
	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	コーディネーター	宮　本　善　行

【協議内容】
・種子島視察の振り返り
種子島中央高校の取り組みについて振り返りをした後、企業連携の仕組み作りについて検討することや、校内の機運醸成を促進していく必要があることを確認した。
・今後の進め方について
指定期間終了後を含め、今後の進め方や予算措置について協議した。特に予算については、どのように確保するかについて引き続き検討していくこととした。

⑫担当者会

日時：令和６年１０月２２日（火）１０：００～１２：００

会場：津和野高等学校

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社 Nex-E	取締役	熊　田　洋　子
	ICT 推進アドバイザー	大　庭　成　晴
	ICT 支援員	森　田　健一郎
津和野高等学校	校長	松　田　　哉
	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇

【協議内容】

・今後の連携について

株式会社 Nex-E 様が津和野町民向けに取り組んでおられる各種 IT 講座の紹介があり、本校の学校設定科目との関連や放課後講座開催の可能性について探った。また本校にて実施している情報Ⅰ等の授業を参観していただき、授業の形態などについて協議した。

⑬担当者会

日時：令和６年１０月３１日（金）１６：３０～１７：００

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇

【協議内容】

・学校設定科目について

今年度どの程度まで内容を具体化していくか、今後のスケジュール等について確認した。

⑭担当者会

日時：令和６年１１月５日（火）１７：００～１７：５０

会場：津和野高等学校

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇

【協議内容】

・学校設定科目について

⑬に引き続き、今年度どの程度まで内容を具体化していくか、今後のスケジュール等について確認した。

⑮担当者会

日時：令和６年１１月５日（火）１８：００～１９：００

会場：バルトソフトウェア株式会社津和野オフィス

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
バルトソフトウェア株式会社	シニアソフトエンジニア	大　石　和　也
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇

【協議内容】

・学校設定科目について

自然科学コース３年次に予定しているプログラミング発展について、どのような内容を実施するか協議した。本校生徒が情報Ⅰにて学習している Python を使ってコードプログラミング演習を行うことを基本方針とした。また、予約システムなど最終的に何か成果物ができること、授業外でも主体的に学べるような余地があるようなカリキュラム構成にすることを確認した。

⑯担当者会

日時：令和６年１１月７日（木）１５：００～１６：００

会場：津和野高等学校

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
島根県商工労働部産業振興課	室長	米　原　陽　介
	係長	松　田　　敦
	係長	船　越　雄　太
	主任主事	大　場　芙　紀
津和野高等学校	校長	松　田　　哉
	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	情報科主任	森　本　正　樹

【協議内容】

・情報Ｉでの連携について

以下の分野において、企業の方に授業をしていただくことを提案した。

＜依頼したい領域　（　）内は時数＞

１情報デザイン(2)

２プログラミング(2)

３シミュレーション(2)

４ネットワーク(2)、セキュリティ(2)

本校は、３クラス展開をしているため、計３０時間をお願いすることを依頼した。産業振興課より、津和野町の企業に授業をお願いする方針が伝えられ、学校設定科目との調整が必要となることから、桜井氏を加えて再度協議することとなった。

・未来共創科卒業生の進路について

地元で活躍する IT 人材を育てることも大切であることを確認し、その方法について協議した。

・IT パスポート受験について

以前産業振興課より依頼があったこのことについて、希望者で実施する方向で校内調整をしていることを報告した。

⑰担当者会

日時：令和６年１１月２６日（火）１０：３０～１１：３０

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
津和野町つわの暮らし推進課	企業誘致担当	豊　田　悠　策
津和野町教育委員会	次長補佐	楠　　寛
島根県商工労働部産業振興課	室長	米　原　陽　介
	係長	松　田　　敦
	係長	船　越　雄　太
	主任主事	大　場　芙　紀
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	情報科主任	森　本　正　樹
	コーディネーター	宮　本　善　行

【協議内容】

・情報Ⅰでの連携について

⑰にて提案した内容を再度確認した。具体的に生徒たちはどのようなことを学んでいて、どのようなことを企業の方に授業をしていただくかについて情報科主任がまとめたものをもとに、再度協議することになった。また、学校設定科目も地元企業に依頼をするため、過負担にならないような調整が必要という認識で一致した。

・ホームページでの発信について

桜井氏より、未来共創科の取り組みについてホームページを更新して発信することについて提案があった。普通科改革担当を中心に作業を進めることとした。

⑱担当者会

日時：令和６年１２月１２日（木）１４：００～１５：００

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社 Nex-E	取締役	熊　田　洋　子
	ICT 推進アドバイザー	大　庭　成　晴
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇

【協議内容】

・未来共創科ホームページ更新について

ホームページの構成について協議した。ターゲットとする閲覧者としては本校を志

望する中学生とし、既に公開している Instagram や YouTube のチャンネルと連携できるような構成とすることとした。また、Google Analytics を用いて本校ホームページの閲覧状況を確認し、ホームページの構成について考えることとした。また、本校ホームページのサーバーや編集画面の確認をした。次回、Google Analytics の設定および、ホームページの具体的な提案をしていただくことを確認した。

⑲担当者会

日時：令和６年１２月２５日（水）１１：３０～１２：３０

会場：津和野高等学校

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社 Nex-E	取締役	熊　田　洋　子
	ICT 推進アドバイザー	大　庭　成　晴
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇

【協議内容】

・未来共創科ホームページ更新について

ホームページの構成について、協議をした。本校ホームページの「中学生の方へ」の部分を中心に改修を行うこと、ホームページのシステムの更新も同時に行うことを確認した。

⑲担当者会

日時：令和７年１月９日（木）１６：３０～１７：００

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社 Nex-E	取締役	熊　田　洋　子
	ICT 推進アドバイザー	大　庭　成　晴
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇

【協議内容】

・未来共創科ホームページ更新について

Google Analytics を本校のホームページに導入し、閲覧者履歴の記録を取り始めた。

・デジタル講座について

Nex-E 大庭様を講師としてデジタル講座を行うことを決定し、実施時期や内容等の調整をした。

⑳担当者会

日時：令和７年１月１７日（木）１６：３０～１７：００

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社 Nex-E	取締役	熊　田　洋　子
	ICT 推進アドバイザー	大　庭　成　晴
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇

【協議内容】

・未来共創科ホームページ更新について

Google Analytics から閲覧者履歴を確認し、どのページがよく見られているかを確認した。

・デジタル講座について

動画作成についての講座を行うこととし、有志による小規模のものから始めることを確認した。

㉑担当者会

日時：令和７年１月２８日（木）１３：００～１４：３０

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社 Nex-E	取締役	熊　田　洋　子
	ICT 推進アドバイザー	大　庭　成　晴
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇

ホームページ作成を依頼するニーズシェア株式会社の方も２名同席した。

【協議内容】

・未来共創科ホームページ更新について

他校のホームページを参考にしながら検討を進めた。中学生に向けて本校の新学科や教育活動について伝えるページを作成することとした。

㉒コンソーシアム会議

日時：令和７年１月３１日（金）１３：００～１４：００

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
島根県教育委員会	企画人事主事	樋　野　大　輔
津和野町つわの暮らし推進課	課長	宮　内　秀　和
	企業誘致担当	豊　田　悠　策
津和野町教育委員会	教育長	岩　本　要　二
	教育次長	山　本　博　之
	次長補佐	楠　　寛
津和野町 ICT 教育推進検討委員会	副委員長	小　田　充　男
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
タイムカプセル株式会社	代表取締役	相　澤　謙一郎
津和野高等学校	校長	松　田　　哉
	教頭	石　原　寛　治
	主幹教諭	和　﨑　陽　子
	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	コーディネーター	宮　本　善　行

【協議内容】

・本年度の取組について

各種会議の実施状況、および学校設定科目の検討状況等について説明を行った。

・その他

中学校では ICT 活用が進んでいない部分もあり、高校での取組を広げてほしいという要望があった。特に、HAN-KOH にデジタル機器を設置し、中学生も使えるようにする取組は魅力的であるという指摘もあった。

他方、デジタル化が進むにつれ文章を書く力が弱くなってきているのではないかという指摘があった。文章を書くためには読書量の確保が必要であり、紙とデジタルをうまく併用し書く力を高めていく必要があることを確認した。

㉓担当者会

日時：令和７年２月４日（火）１６：３０～１８：００

会場：渋谷スクランブルスクエア

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社 Nex-E	取締役	熊　田　洋　子
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	コーディネーター	宮　本　善　行

ホームページ作成を依頼するニーズシェア株式会社の方も３名同席した。

【協議内容】

・未来共創科ホームページ更新について

本校の歴史や今までの取り組み、周囲環境などについて説明をした上で、ホームページ案の作成を依頼した。

㉔担当者会

日時：令和７年２月６日（木）１６：３０～１７：００

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社 Nex-E	ICT 推進アドバイザー	大　庭　成　晴
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇

【協議内容】

・デジタル講座について

動画作成における基本的な方法や動画市場についての説明の後、Clipchamp を用いて動画作成体験をする講座にすることとした。

㉕担当者会

日時：令和７年２月１７日（月）１１：００～１２：００

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社 Nex-E	取締役	熊　田　洋　子
	ICT 推進アドバイザー	大　庭　成　晴
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	コーディネーター	宮　本　善　行

ホームページ作成を依頼するニーズシェア株式会社の方も２名同席した。

【協議内容】

・未来共創科ホームページ更新について

ホームページ案についての説明を受けた。ページの色については緑を基調としたもので、本校の周囲環境と一致していることや、中学生にとって閲覧しやすい構成になっていることを維持しつつ、企業や行政の方と協力して教育活動をすることや、教育課程について掲載することを依頼した。

㉖担当者会

日時：令和７年２月２８日（金）１６：００～１７：００

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社 Nex-E	ICT 推進アドバイザー	大　庭　成　晴
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇

【協議内容】

・デジタル講座について

２月１２日（水）に行ったデジタル講座について振り返り、次年度定期開催に向けて、講座内容や実施時期などについて検討した。また、本校の生徒が講座で学んだことを地域の方や小中学生に教えるといった試みについての可能性を探った。

・ホームページについて

Google Analytics の設定について調整をした。

㉗コンソーシアム会議（予定）

日時：令和７年３月１４日（金）１３：３０～１４：３０

会場：津和野高等学校（ハイブリッド）

【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
島根県教育委員会	教育監	木　原　和　典
	企画人事主事	樋　野　大　輔
津和野町つわの暮らし推進課	課長	宮　内　秀　和
	企業誘致担当	豊　田　悠　策
津和野町教育委員会	教育長	岩　本　要　二
	教育次長	山　本　博　之
	次長補佐	楠　　寛
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
タイムカプセル株式会社	代表取締役	相　澤　謙一郎
津和野高等学校	校長	松　田　　哉
	教頭	石　原　寛　治
	主幹教諭	和　﨑　陽　子
	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	コーディネーター	宮　本　善　行

【協議内容】

今年度の振り返りと次年度の予定について確認する予定。

ⅲ　授業改善への取組

１　公開授業旬間の実施

ICT モデル校事業を契機に、１学期と２学期に毎年行っている。「ICT を生徒が活用することにより、生徒が主体的に学ぶ授業」をテーマとし、全授業担当者が公開授業を行っている。授業参観者は、ICT モデル校事業の成果物である ICT 活用チェック表の一部を載せた公開授業参観シートを記入し、提出することとしている。本年度２学期は、次年度新学科設立にあわせて作成したグランドデザインにある育てたい資質・能力のうち、どの部分を身につけることを狙った授業であるかも事前に共有をして行った。

＜実施期間＞

令和６年１１月７日（木）～１１月２０日（水）

＜実施内容＞

島根県立津和野高等学校　公開授業一覧（11月7日（木）～20日（水））

期日	時限	科目	実施クラス	教室	担当者	授業内容	生徒が個人端末を使う場面	資質能力
11月7日 (木)	1	音楽Ⅰ	1年選択者	音楽	田原　義崇	リズムで表現しよう	作品制作	思考判断力
11月7日 (木)	1	美術Ⅰ	1年選択者	美術教室	篠田　巧	商品のデザインを作成しよう	個人端末によるデザイン	思考判断力
11月7日 (木)	2	化学	2年自然科学	化学	川上　真	コロイド溶液とは	課題発表（スライド）	知的好奇心
11月7日 (木)	2	スポーツⅡ	3年生総合	体育館	石原　茉耶	バスケットボール	グループで意見を記入、共有	対話力
11月7日 (木)	3	日本史探究	3年選択者	3-2教室	佐々利　毅	近代社会を通観する「問い」「仮説」の検証	第15章の振り返りの共有、「問い」「仮説」への検証の記入	思考判断力
11月7日 (木)	3	地理探究	3年選択者	3-1教室	宮島　忠史	EUの共通農業政策と工業	インターネット上のレポート記事から学習を深める	情報活用能力
11月7日 (木)	4	生物	2年選択者	24教室	福満　尚	進化（種分化）	教科書の資料の視聴	知識・技能
11月7日 (木)	4	物理	2年選択者	物理	深野　勝洋	気柱管共鳴の実験	実験データ処理	思考判断力
11月8日 (金)	1	BEβ	2年自然科学	2-2教室	河野　愛	ＣＮＮ　環境問題に関するニュースを聞き取る	気候変動による環境への影響を調べて、自分の考えをまとめる	思考判断力
11月11日 (月)	5	世界史探究	3年選択者	33教室	陶山　晋太郎	冷戦と第三世界の台頭	探究課題について、各自がまとめて発表する際	思考判断力
11月13日 (水)	1	数学Ⅰ	1年Yコース	11教室	日高　史和	データの分析	データを分析する	知識・技能
11月13日 (水)	5	数学A	1年Zコース	14教室	寺岡　智弘	三角形の外心	外心についての考察	思考判断力
11月14日 (木)	3	体育	1年	体育館	植田　悟	バスケットボール	フォーメーションの確認と理解	知識・技能
11月14日 (木)	2	古典探究	3-1	3年	雪野　真優子	Canvaでグループワーク	グループの意見をまとめる	表現力
11月14日 (木)	5	情報Ⅰ	2-2	Amane	森本　正樹	プログラミング	プログラミングの演習を行う場面	思考判断力
11月14日 (木)	6	情報演習	3年選択者	3-1教室	石原　寛治	データの分析	データの分析と解釈	思考判断力
11月15日 (金)	1	言語文化	1-2	視聴覚教室	安達　美穂	「狐虎の威を借る」の劇をするために脚本を考える	グループで脚本を共同編集する	思考判断力
11月15日 (金)	3	英語cⅡ	2-1	2-1教室	堀尾　真吾	みんなが考えるDeep Learningとは	AIを活用したDeep Learning のアイディアを作る	知的好奇心
11月18日 (月)	3	英語cⅡ	2-2	2-2	和﨑　陽子	ディクトグロスに挑戦してみよう	グループで意見をまとめ、共有する	表現力
11月19日 (火)	6	英語cⅢ	3年	3-2教室	山根　幸久	おすすめのアルバイト	グループでまとめた意見の共有と発表	思考判断力
11月20日 (水)	1	文学国語	2-2	2-2教室	青木　穂乃美	登場人物の心情を読み解く	グループの意見をまとめ、共有する場面	協働性
11月20日 (水)	3	数学Ⅰ	1年Zコース	14教室	舟木　亮介	データの分析	スプレッドシートを用いて分析する	思考判断力

＜授業の様子＞

（世界史）

（数学）

（国語）

（美術）

＜成果＞
・ICT 活用チェック表の平均値が 4.6（昨年度同回 3.7）となり、大幅に上昇した。
＜分析＞
・ICT を活用することによって生徒同士が対話をして学びを深める実践が多かったこともあり、ICT 活用チェック表の平均値が最大値である 5 に近づけることができた。グランドデザインを意識することにより、そのような実践が多かったと考える。新学科の学びに向けた授業改善の契機になったと考える。

＜公開授業参観シート＞

公開授業参観シート

参観者お名前	

参観された授業について、よろしければコメントをお願いします。

日時	月　　日　　限	科目/学年	/	担当教員	

1．参観された授業は次の分類のうち、どの段階だと思われますか。該当する1ヶ所に○印を付けてください。

生徒の学び	授業	・黒板と教科書等を用いる。 ・主に教師は知識伝達の授業を行う。	・プロジェクターに投影された教材を生徒が見る。 ・主に教師は知識伝達の授業を行う。	・個別端末を用いて生徒が教師とやり取りする。 ・教材が生徒の個別端末にも配信される。 ・主に教師は知識伝達の授業を行う。	・授業中の半分以上、生徒が活動している。 ・生徒各自が自分の役割を認識し、端末を活用し協力して意見をまとめていく。 ・教師は教える立場というより支援する立場。	・授業中の大部分において、生徒が活動している。 ・生徒が既習事項を活用し、授業中に端末を活用して生徒同士で共有し、意見をまとめていく。 ・教師は生徒の活動を支援する立場。
評価						

2．参加された授業について、自由にコメントをお願いします。
（特にどのあたりが「育成したい資質能力」に繋がっているか、ご記入していただけると喜びます。）

2　島根県教育庁教育指導課「主体的・対話的で深い学びを実現するための授業力向上プロジェクト事業」の活用

本校は、令和元年度より始まった上記事業の前事業である「主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善プロジェクト事業」への参加を含め、本年度で６年目の参加となる。本年度は３名の教員が研究推進教員として参加した。そのうち、昨年度より研究推進教員として参加している国語科教員の事例を紹介する。

＜授業の概要＞
日時：令和６年９月２４日（火）　１１：００～１１：５０
対象：２年３組　２７名
科目：古典探究
単元：源氏物語「若紫」

＜授業実施の背景＞

授業者は、源氏物語はについて既有知識の量（登場人物、一夫多妻制、当時の女性の立ち位置等）によって理解度が変わることを今までの実践で感じているが、一斉授業で知識の導入を行ったとしても最後まで残らないことが多かったと分析している。昨年度、研究推進教員として「筒井筒」を扱った知識構成型ジグソー法（以下ジグソー法）の授業を１１月に実践したところ、年度末のアンケートにてその授業内容のことを覚えていることが分かった。そこで「若紫」を読む際、導入の段階でジグソー法の授業を実施すれば既有知識の量を保持したまま読解できるため、生徒の理解度や作品に対する興味関心も高まり、自ら学び続ける姿勢を育成することを目指して実施した。

＜授業の概要＞

光源氏はどのような人物であるかを、異なる資料を読んだ 3 名がグループワークで互いの情報を共有し、自分たちの考えをまとめて発表する授業を行った。

＜授業実施時の工夫＞

・古典本文の読解よりも既有知識量を増やすことを目的としていたため、授業で扱ったワークシートは図表や漫画等を用い、生徒が取り組みやすいようにした。
・源氏物語は恋愛物語であること、光源氏が魅力的であることが分かる資料を中心に用意し、生徒の興味関心を引きつけようとした。
・各グループが同じ Google スライドのファイルを共同編集することで自分たちの意見をまとめ、他のグループの意見も授業後であっても閲覧できるようにした。

＜授業実施時、授業実施後の生徒の様子＞

・全体として物語の背景の理解が深まり、興味関心も高まった。この授業は２学期中間試験前に実施したものであるが、試験期間中に授業がなくても生徒たちは内容を覚えていた。
・読解の授業をした際も、文法的な内容が理解できると物語の内容理解が深まることを伝えると、文法学習を好まない生徒であっても自らその項目を調べ、学びを深めようとしていた。

＜今後の展開＞

・読解終了後にまとめの授業を行い、光源氏の印象について再度生徒に考えさせることを検討している。その際９月に行った授業と比較して、光源氏の捉え方について変化があったり、自分たちの意見を説明する際の根拠がより説得力のあるものになっている（例えば本文を引用している）といった生徒たちの深まりが見られることを期待したい。
・最終的には、生徒が自ら初見の文章を自力で読み切る力の育成に繋げたい。様々な情報を集めて課題解決に取り組む姿に繋げたい。

３　ICT を活用した生徒主体の授業への取り組み

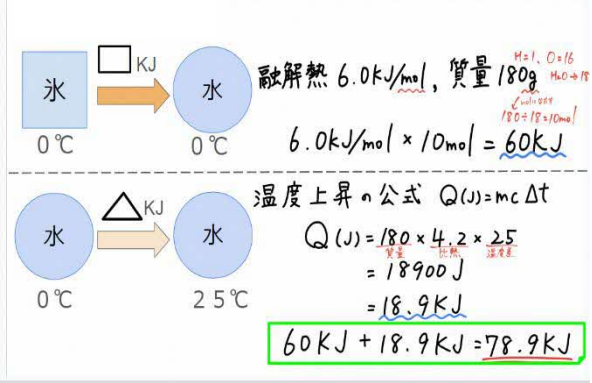
生徒への１人１台端末の環境が整ったことを有効活用し、生徒主体で授業を進行させる取り組みが様々行われている。このうち、化学教員の事例を紹介する。

＜授業の概要＞
対象：２年生自然科学コース　１４名
科目：化学
内容：各単元項目を生徒１人１人が Google スライドを使って説明をする授業

＜授業の流れ＞
１．概ね１ヶ月前に、各生徒がどの単元項目の担当をするか決める。
２．担当生徒は授業当日までに説明用スライドを用意する。説明内容について不明点があれば、担当教員に事前に質問に行く。
３．授業当日、生徒は用意したスライドを使って説明をする。その後、質問を受け付ける。生徒から質問がない場合は教員が行う。教員は質問をすることで、担当生徒の説明が不足している部分を補う。万一生徒が質問に答えられない場合は、再度調べて次の授業で発表することとし、教員が答えを言わない。

＜成果と課題＞
・生徒は、自分が説明した分野の理解度が特に上がった。
・生徒が説明しているので、聞き手役の生徒もよく話を聞いていた。
・教員が説明する授業と比べ、授業進度が速くなった。
・生徒同士で学び合う雰囲気が醸成された。
・生徒の説明に対して、他の生徒がなかなか質問しようとしないことについては改善が必要である。

＜参考資料＞生徒作成の説明用スライド



４　教員向け研修の実施

未来共創科にて生徒に身につけさせたい情報活用能力について、教員への理解促進の一環として研修会を行った。

日時：令和６年１２月１８日（水）　１６：３０～１７：００
講師：本校数学科教員
対象：本校教員
内容：データの分析

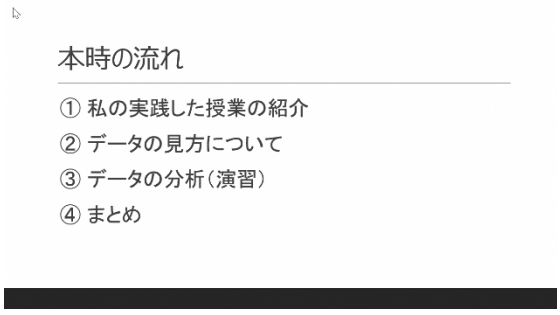
＜研修の概要＞

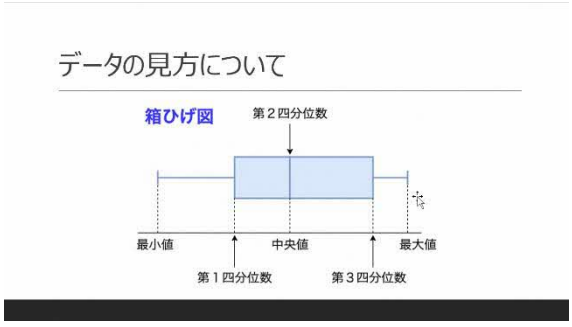
数学Ⅰの学習内容である「箱ひげ図」について、その見方や作り方についての説明を本校数学科教員より受け、同時並行して行われた成績会議の資料にある、各科目の得点分布を箱ひげ図で示したものについて読み取った。また、ダミーデータを用いて各自の端末で箱ひげ図の作成演習を行った。

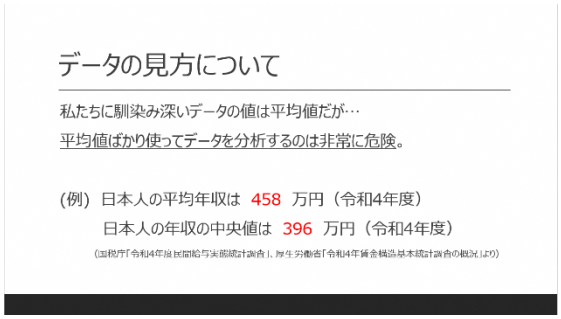
＜成果と展望＞

成績会議の資料を、今までは度数分布表のみで掲載していたが、箱ひげ図で表すことにより、集団の傾向がつかみやすくなることを確認できた。このようなデータ分析は、探究学習における課題の発見や自分たちの主張を説得力のあるものにするために有効であることを確認し、生徒が取り組んでいくような支援をすることを共通認識とした。

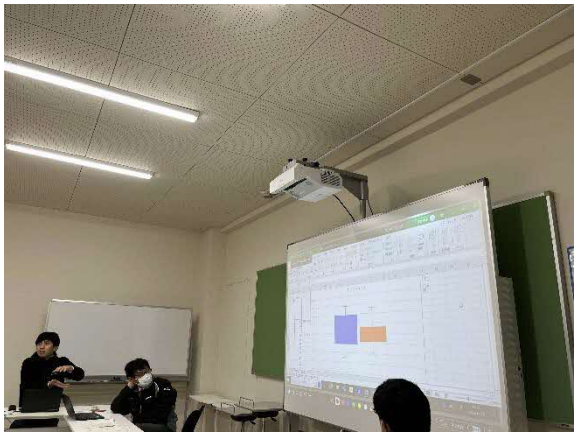
＜研修スライド資料（抜粋）＞







＜研修の様子＞



ⅳ　地域と連携した探究活動への取組

１　総合的な探究の時間全体概要

津和野高校は、県外生が約40%を占め多様な生徒集団である。特性を生かし、多様な視点を持ち、粘り強く課題解決に取り組む人材育成を目指している。これまで県教育委員会「主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善プロジェクト事業」の拠点校、「ICT モデル事業」研究拠点校、文部科学省の「CORE ハイスクール事業」への参加など改革を進め、多様な視点を持ち対話的に深く学び、ICT を活用した校内を超えた学びが実現できるようになってきた。しかし、様々なことに目を向けることはできても実際何が問題であるかを「客観的に課題発見する力」「粘り強く取り組む力」は充分とは言えない。

津和野高校の「総合的な探究の時間」は、生徒の興味関心に基づいた学びを深めると同時に、地域との連携を強化し、町の活性化につなげる取り組みとして実施されている。

探究学習や放課後の時間を活用した課題解決学習では、コーディネーター(CN)など教員以外の力も借りながら学校から地域社会に飛び出していく。生徒の挑戦を学校と地域社会で応援する気風が定着している。高校の方針を「やってみたいをやってみる」にする学校として課題解決型の学習の深化に努めている。

総合的な探究の時間は、1 年生で自分の興味関心事を「さがす」、2 年生で自分の興味関心事について実際に「やってみる」、3 年生で自分の進路に「つなぐ」という流れで設計した T-PLAN をベースとしている。令和 6 年度は、1 年生については『ブリコラージュゼミ』『トークフォークダンス』といった固有名詞のついた授業を実施する流れが確立している。2 年生の授業については、公民館を活用した地域活動の展開により地域との協力を深める方法に比重を高めた。3 年生については、地域ボランティアや自己理解のためのワークショップといった新たな取り組みを取り入れた。

２　総合的な探究の時間の学習内容（学年別）

1 年生：地域との出会いを通じた自己発見

・地域体験型授業『Feel ° C Walk』や『ブリコラージュゼミ』を通じて、生徒が地域の魅力や課題に触れる機会を提供している。

・Feel ° C Walk は、探究学習の第一人者である市川力氏が考案したフィールドワーク方法で、地域を歩き、地元の文化や自然に触れることで「発見の感度」を高める。

・ブリコラージュゼミは、地域住民が講師となり、地域での暮らしや余暇の過ごし方、仕事を体験する講座。

・ブリコラージュゼミでは、地域住民を講師として依頼することで、地域のリソースを活用した学びの場を創出している。ブリコラージュゼミは、生徒の学びの機会になっているとともに、地域人材の発掘・可視化にもつながっている。

・生徒が「自分の可能性を広げる人や場所」に気づき、自己理解を深めることを目指し、地域の活性化につながる可能性を広げる。

2 年生：公民館拠点型のグループ活動

これまでも、生徒一人一人が地域を舞台に探究活動やプロジェクト活動を実施してきたが、新設された『ツコウセッション』では、公民館を拠点に地域課題の解決や地域資源の活用を目指したグループ活動を展開している。従来は、高校周辺にとどまっていた探究活動を町内全域で展開し、各地域の活性化と共に、公民館を核とした社会教育の役割の再定義の機会にもなっている。

公民館を核とした探究活動の例：

・地域の資源であるピザ窯を利用したピザ作りや、地域の人に向けた交流の場を企画。

・地域の子どもが楽しめるようなイベントを企画してほしいという依頼を受け、高校生がアイデアを出し合い、イベントを実施。

・学童の利用者や小学生を対象に、ドッジボールなどでの交流会を実施

個人での探究活動の例：

・観光協会と連携して、サイクリングツアーを企画・実施。

・コロナ禍で途絶えていた地域の行事（灯籠流し）を、高校生が中心となって再開。

・使われなくなった学生服を、他の生徒が貰い受けて再利用する仕組みを考案し、実際に運営。

3 年生：地域活動の成果を進路につなげる

・地域ボランティアや自己理解を深めるためのアート活動を導入。

・地域での具体的な活動：

・空き家やウッドデッキの改修、大豆の定植、遊び場整備など、地域の課題解決や活性化に寄与。

・活動を通じて得た経験を進路に活かせる形で記録・整理し、地域に根ざした学びを将来の進路に結びつけている。自身の探究活動を振り返るマインドマップとワークシートを作成し、個別の面談を実施。これらを元に志望理由書を作成し、進路に繋げている。

３　探究活動成果発表会の取り組みと当日の概要

令和 7 年 2 月 4 日（火）に、津和野高校 2 年生の「総合的な探究の時間」（通称『ツコウセッション』）の成果発表会を実施した。今年度は、個々の生徒が自分の興味や関心を深めた探究活動や、公民館を中心とした地域との連携で取り組んできた活動の成果を発表した。

発表会には、27 名の地域の方々が観覧のために訪れてくださった。公民館や地域の教育関係の方、また、一人一人の高校生に寄り添ってくださった方など、これだけ多くの方々が、生徒の一年間の探究の成果発表のために集まってくださったのは、今年

度が初めてとなる。また、1年生の生徒たちも観覧し、来年の探究活動に向けてのイメージを膨らませた他、積極的に質疑の時間にも参加する様子がみられた。年度当初から津和野高校の探究活動を見守り、ご助言くださった島根県立大学の播本先生、西嶋先生もご来場くださり、総評をいただいた。

今回は、新しい試みとしてポスターセッション（ブースごとに発表内容となるポスターを掲示し、各ブース同時並行で発表していくスタイル）に挑戦した。発表会を通じて、生徒たちの成長が感じられるものとなった。

＜生徒の発表からのハイライト＞

- 演劇について探究した生徒は、その分野の有識者の方の貴重な時間をいただいてお話を伺い、さらに自分も実際に演劇活動を実践してみるという経験について発表した。また、益田まで一人で観劇に行くなど積極的に活動を広げ、1年生には「興味がないと思っても、まずはなんでもやってみること」が大切だと伝えた。ツコウが大事にしたい、「思いっきりうろうろすること」をまさに体現していたように思う。
- 移住者を中心に、津和野に住んでいる大人へのヒアリング/インタビューを重ねてきた生徒は、困った時には学校内外の大人たちが助けてくれる津和野町の環境を振り返り、最後に「大人は案外優しい」と語ってくれた。シンプルな言葉だが、ここには心からの思いが詰まっていると感じた。この経験を1年生にも伝え、「どんどん頼っていいんだよ」と、メッセージを送っていた。
- また、今年度の公民館連携でお世話になった地域の方々に、生徒が得た学びを直接伝える場面も見受けられた。後日、生徒を受け入れしてくれた公民館に、年間の振り返りで伺った際に発表会についても聞いたところ、「発表会を見て、初めてこの授業の意味をきちんと理解できたように感じる。県外からも生徒が進学しており、津和野町のふるさと教育とは異なる環境で育ってきた生徒もい

る中で、発表会の最後に生徒から『地域の方々に感謝したい』という声を聞き、地域での受け入れの意味を感じられた。」と話してくださった。地域で生徒を受け入れて活動させてもらうことが、生徒にとっては『地域に貢献しようとする意欲の喚起』に、地域にとっては『地域を支える次世代の育成』に繋がり、この発表会はその意味をお互いに理解する場にもなったと言える。

- 発表を真剣に聞いて、今後の提案をしてくださった大人の方もいた。多様な職業の大人にインタビューしてきた結果を発表した生徒に対して、医療現場でのインタビューもしてはどうか、と申し出てくださった病院関係者の方もいらっしゃった。また、目に残りやすいエフェクトなど、効果的な動画制作に関する探究を行い、視聴回数を増やすための方法を考察した生徒の発表を聞いて、今後、動画編集のレクチャーを公民館でしてほしい、と提案してくださった公民館関係者の方もいらっしゃった。

《成果と課題》

「地域に開かれた」発表の場のあり方

- 今年度の発表会は、これまで校内で行われた生徒同士の発表から、地域に開かれた形式に挑戦した。特に、同時並行で展開される「ポスターセッション」形式を採用し、短時間での発表とブース内での対話が促進された。
- 公民館との連携により、生徒が地域に出る機会を創出し、成果を外部に見せることができた。結果として、27 名の地域の方々が来場し、生徒と教員が直接コミュニケーションを取る場が生まれた。
- 発表した生徒と来場者の間で、発表会以降の動きにも繋がるようなやりとりも見られた。

改善点

- 一部、生徒の発表時の声が聞き取りにくい、資料の文字が読みづらいという指摘があった。
- より良い運営方法については、来年度以降の協議課題として検討する必要がある。

全体としての学びと地域連携の意義

- ツコウセッションを通して、生徒は地域の愛情や支援、自然からのインスピレーションを受け、活動への新たな気づきや課題を得ることができた。
- 津和野高校の探究活動は、個々の考察だけでなく、地域との関わりから生まれる学びを重視しており、今後も地域との連携を強化する必要がある。

４　参　考　資　料

（１）１年生具体的な取り組み及び成果と課題

①具体的な取り組み

6 月 6 日開催（ブリコラージュゼミ）

初	思春期の壁をぶっ壊せ！	村上　智美
初	自分のスマホでムービーを作ろう	林　幸一
初	和菓子作り体験！源氏巻きと練り切りを作ろう！	原田　喜夫
	はじめての路上観察学	山岡　浩二
初	喫茶店の過ごし方を体感しよう	横山　元志
	宇宙を通して自分の未来を想像しよう	細井　純一
初	#幸せ #価値観 #SDGs #発展途上国 #ボードゲーム	藤岡　篤司
	世界につながるモルックを楽しく体験してみよう！	萩野　慈隆

7 月 16 日開催

初	壁を登る　～スポーツクライミングにチャレンジ！～	原田　秀明 大垣　隆
	呉服屋さんで浴衣の着方体験	岡崎　里絵
初	整体師に教わる、「歩き」を通して、昔の日本人の身体カン（観・感・勘）に触れる教室	松永　敏行
	橋の模型をストローで作ってみよう！	畔柳　知宏
	知ったら沼！おもしろコーヒー講座	今井　駿佑
	手で考える食～豆腐づくり～	國方　あや
初	可視化の力を体験する。	佐々木　桃子

全講師が町内在住の方である。初めて来ていただく講師の方がいることで高校生に関わっていただく人の幅が増えたことや、初めて行う講座があることで体験のバリエーションの豊かさも確保できた。

（写真左）2024 年 6 月 6 日　ブリコラージュ・ゼミにて源氏巻き作りをしている様子
（写真右）2024 年 7 月 18 日　ブリコラージュ・ゼミにて浴衣の着方体験をしている様子

②成果と課題

生徒の振り返りを見ると、「やっぱり自分が興味を持つのは建築系なんだと気づいた」（『橋の模型をストローで作ってみよう！』参加）、「自分の１年後にやりたいことはこれなのかなと感じた。」（『自分のスマホでムービーを作ろう』参加）と経験を自分の将来に繋げている様子が感じられ、生徒の感想に結果として現れている。

しかしながら、『Feel ℃ Walk』や『ブリコラージュゼミ』は大人側が生徒たちに目的を伝えられていない、もしくは目的を達成するために最適なワークではない可能性がある。本来の「ブリコラージュ」は計画的に準備したものでなくありあわせのもので何かを作るという意味があり、そのため身の回りの小さなものを「いつか何かの役に立つと思ってとっておく」という原則がある。高校 3 年間と言わず 10 年 20 年先に役立つ可能性などもあると考え、安易に結果を求めなくてもよいのかもしれない。一方、カリキュラムとして評価をつけることや 2 年次以降の探究活動との接続も、授業として行う以上は考えたい部分ではあり、この塩梅については常に葛藤がある。教員から「教科との接続」を授業の中で意識する案も出てきており、根本的な目的の部分から、見直してみてもいいのではないかと思う。

この他に、生徒の振り返りの中には、まだまだ思考の浅さが感じられるものも少なくなかった。生徒と直接面談を通して、「なぜそう感じたのか」をもう一歩考えられる視点をもち、具体的に考える・書く・行動することを促したい。事前準備の時間には、その回の授業の目的を伝えることや下調べを行い、授業に取り組む姿勢を作るとともに、「なぜ」を踏み込んで考えられるきっかけを作っていきたい。

（２）2 年生具体的な取り組み及び成果と課題

①具体的な取り組み

自分自身の興味関心事に基づき個人で活動を行う生徒と、町内の公民館を拠点としてグループで活動を行う生徒の 2 パターンに分かれている。個人によるプロジェクト活動に加え、町内の公民館に拠点を置きながらグループ単位で活動を行う『ツコウセッション』の展開した。地域にすでにある活動や、地域内の困りごとに対するボランティア活動に参画し、自己有用感を持ちながら社会参画の形を探り、自己理解を深め、地域の課題への理解を実体験として理解する。町内全域に高校生が関わる機会を創出し、まちの活性化につながることも期待したものである。

拠点となる高校及び公民館を「スタジオ」と呼び、今年度は、畑迫、日原、青原、左鐙の 4 公民館と、津和野高校（ツコウ）と津和野中央を合同スタジオとし、計 5 拠点を中心に活動を展開している。

公民館側が持つ困りごとを率直に高校生に投げかけ、それを元に高校生がアイデア出しを行った。自分たち自身で実行まで持っていき、それを周りの大人たちが支える形でプロジェクトが進もうとしている。

（写真左上）2024 年 7 月 16 日　日原スタジオの生徒が天文台にて説明を受ける様子

（写真右上）2024 年 7 月 16 日　青原スタジオの生徒が学童に伺い小学生と交流する様子

（写真左下）2024 年 7 月 16 日　左鐙スタジオの生徒が保育園内の畑の説明を受ける様子

（写真右下）2024 年 7 月 16 日　畑迫スタジオの生徒が企画について話し合いを行う様子

②成果と課題

『ツコウセッション』について、開かれた教育課程を実現させることができ、「まち全体が学びの場」として機能したのではないかと考える。高校所在地の津和野地区以外の地域に高校生が出て行く機会が、地域の人が生徒にとっての先生であることを認識することができた。自分自身の興味と公民館のオーダーを上手く取り入れてテーマを見つけていたり、「自分の活動に意味があるんだろうか？」という気付きが生まれ、それぞれがスモールステップに取り組めているように感じる。

一方で、その時々の体験を学びに変えるための働きかけに対して、更なるサポートが必要だと考えている。学びを言語化するための語彙が十分ではない、課題に向かうエビデンスが不足しているなどがある。地域の社会資源をはじめの段階でもっと知ることができる仕組みづくり、公民館側の高校生に対するオーダーが入るプロジェクトとして動かす方が、高校生たちにとっても学びに繋がるのではないかという意見も挙がっている。

「やってみたいをやってみる」を残しながら、利他的な視点も高校生たちには学んでほしい。「誰のために」の意識づけをしつつ、「自分らしく社会貢献する」にはという投げかけを意識して伴走を行いたい。さらにデータサイエンスを活用した課題解決など、R７年度から実施される普通科改革の流れを汲んだ内容を取り入れたい。

（３）３年生具体的な取り組み及び成果と課題

①具体的な取り組み

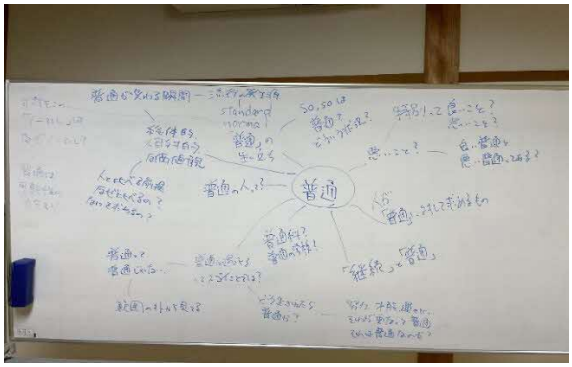
3 年生の総合的な探究の時間では、高校で実施してきた活動を踏まえ、未来の進路等に「つなぐ」活動を行なっている。近年の大学進学においてメジャーになりつつある総合型選抜・推薦選抜では、高校時代の経験を基に志望理由や活動報告を記述することが求められる。自分自身にしか得られない経験は必要不可欠であり、今年度は活動の時間を確保し進路との接続をより滑らかにできるよう授業内容のブラッシュアップを行った。次のような 3 コース制とした。

A.2 年生に引き続き自身のプロジェクト活動を進めるコース

B.地域の方のお手伝いをするコース

C.アートの手法により自己表現を行い自己理解を深めるコース

参加人数は概ね三等分される結果となった。A コースでは 2 年次に続いて検証活動を行った生徒。B コースは地域の方のご協力もあり「空き家の改修（主に廃品の整理）」「ウッドデッキの改修」「大豆の定植」「プレイパークの整備」の 4 つの活動。C コースは、非常勤コーディネーターの玉木とともに全 4 回の講座を実施した。進路との接続は、これまで本校の進路指導に多大な実績のある特任コーディネーターを中心に授業設計を行い、自身を振り返るマインドマップとワークシートを作成し、探究コースについては個別の面談を行った。



（写真左上）2024 年 6 月 5 日　C コースの生徒がワークに取り組む様子
（写真左下）2024 年 6 月 13 日 B コースの生徒が大豆の定植を行う様子
（写真右上）2024 年 6 月 5 日　B コースの生徒が廃品整理を行う様子
（写真右下）対話で浮かんできた様々な疑問と対話の記録

②成果と課題

全体的な年間計画にはじまり、コースの分割案やその内容を教員との話し合いで決めることができたのは、一緒に授業づくりをしていける土台となりうるものだった。3 コース分割での展開も、今後につながるものであったように思う。2 年生では『ツコウセッション』として公民館連携の活動を行なっているが、今回の構成は 2 年生の活動でも応用できるように思う。コースごとに振り返りの内容や進度に差があり、再び合同で講座を持った際にどのように収束させるかという課題があった。C コースは自己理解を進めてきている一方で、A コースでは振り返りの時間を取れていなかった。

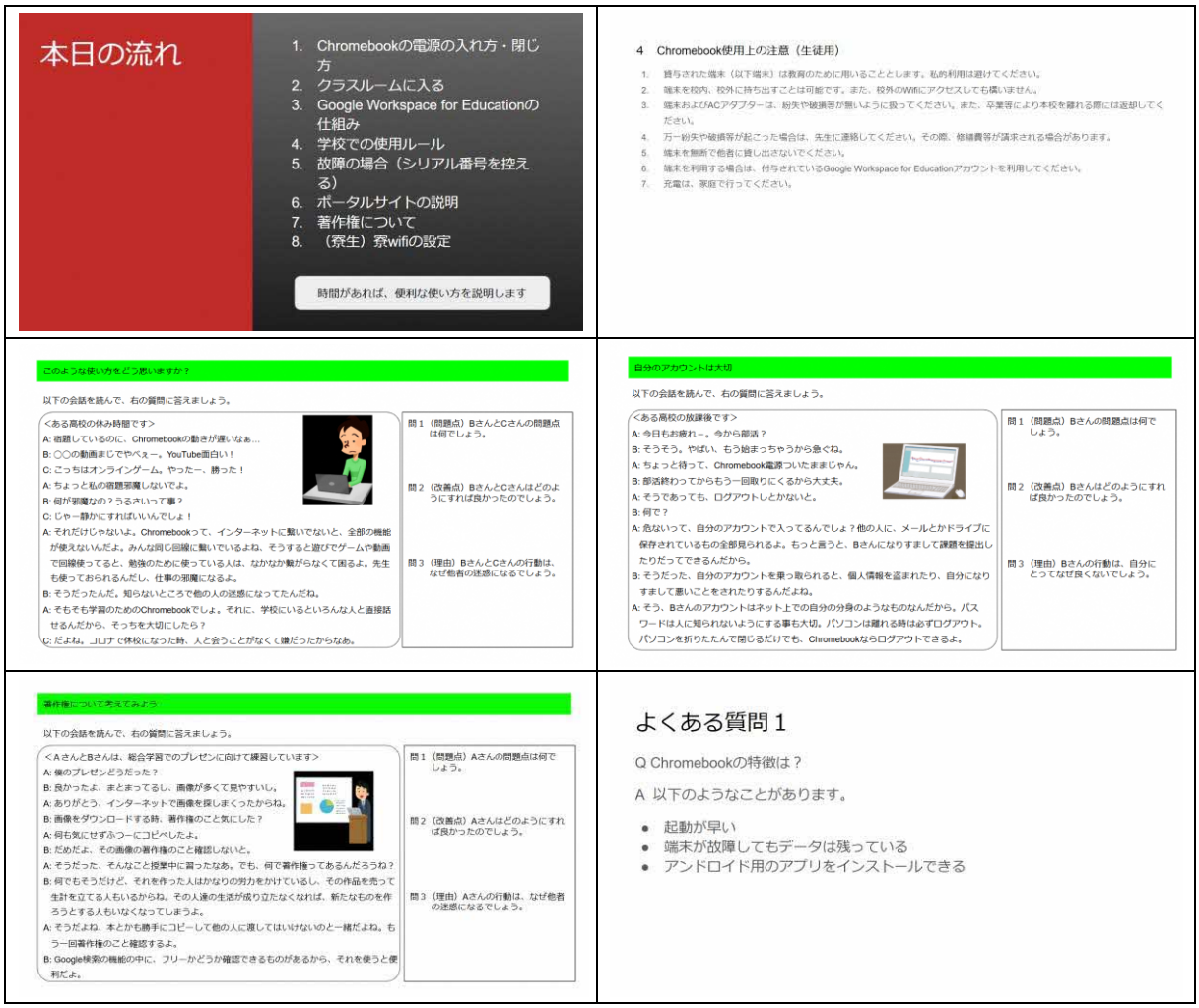
ｖ　情報活用能力育成のための取組

１　新入生へのガイダンス

日時：令和６年４月１５日（月）　５～６限

対象：１年生４６名

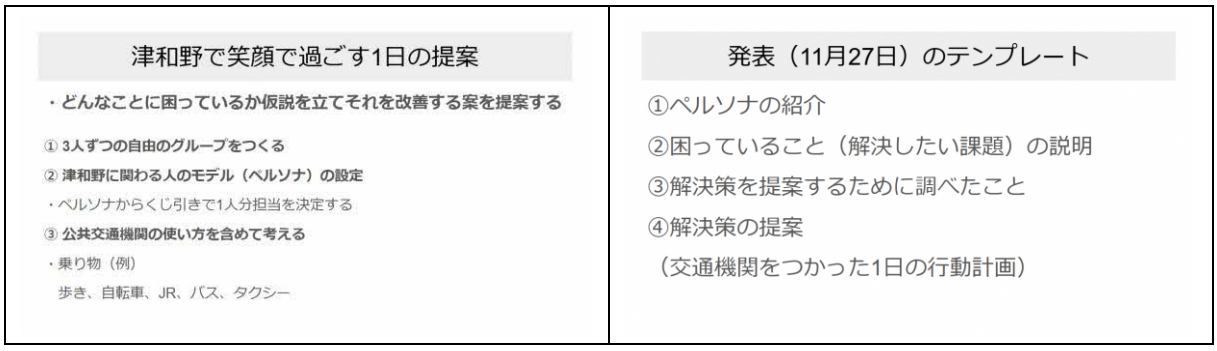
入学時に Chromebook を購入することになっており、授業等で活用するためにその使い方についてガイダンスを行った。内容については、以下のスライド資料の通り基本的な操作方法と守るべきルールについて説明した。生徒は自分たちが購入した Chromebook を初めて起動する機会だったため、初期設定に時間がかかり予定していたものを全て行うことはできなかったが、基本的な操作について伝達することができた。



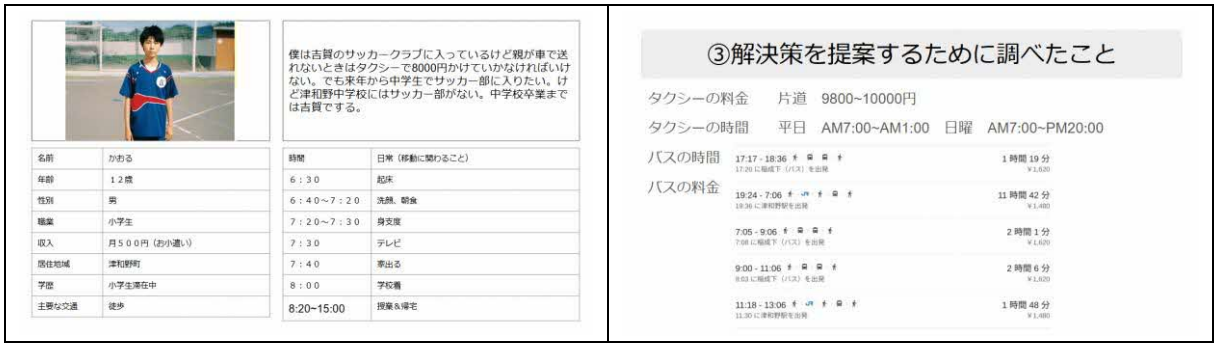
２　２年生総合コースでの実践

２年生総合コースの科目「産業社会と人間」において、データを用いた課題解決に取り組む実践を行った。年度前半は地域のことについての学習やデータに触れることを中心に取り組み、後半は津和野町在住しているまたは津和野町を訪れている仮定の人について想定し、その人の悩みを仮定し、データなどを用いてその解決方について考えるグループワークを行った。最初は、想定した人物についての事柄やその課題が抽象的であり、解決方法も根拠に乏しく説得力に欠けるものであった。ただ、プレゼンやそれに対するフィードバックを繰り返す中で、想定に対する具体性が出てきたり、根拠に数字を用いて説明しようとするグループが増えてきた。その結果、プレゼンの時間も伸びていった。

【プレゼンの課題指示】



【生徒のスライドの一部】



３　デジタル講座の実施

日時：令和６年９月１０日（火）　５～７限

対象：２年生総合コースの２６名

産業振興課主催の IT 出前講座を活用し、株式会社バイタルリードの３名の方にデータ活用講座を実施していただいた。自分たちの考える理想の津和野町の姿と現状を比較し、その乖離をどのように縮めていくかについて、提供された交通等のデータをもとに解決法を考える内容であった。難しい課題ではあったが、地域の現状についてデータを元に把握し、解決法を考えることに最後まで取り組んでいた。

事後に実施したアンケートでは、約 80%の生徒が講座について前向きな印象を持ち、IT への関心を持った生徒も 10%増加した。また以下のような記述もあり、生徒の関心を高めたり今後学んでいく方向についての手がかりを得ることができたようである。

【参加生徒の自由記述より】

・証拠を探したり、説明したりする際のキーワードがいまいちわかっていないので、そこの部分を少し学びたいと思いました。

・今回グループ活動がメインだったので、自分の意見だけではなく周りの人の意見が聞けてよかったです。自分は日頃から津和野町の課題について考えることがあるので、今回交通面について考えて汽車通の人の意見が聞けて新しい視点から考えることができました。しかし、その課題を解決するためにどのような取り組みをすべきなのか、またその取組をする効果や実際に行って結果が出たなどのデータを調べて説明する力が自分には、まだ足りていないと感じることができました。

また、これとは別に以下のような講座を計画している。

日時：令和７年３月１４日（金）　５～６限

対象：２年生総合コースの２５名

ウィキペディアの日本語版管理者であるあらいしょうへい氏を講師として招き、津和野町のことについてウィキペディアへの投稿に挑戦する講座を実施する。記載する際の情報の信憑性の確認の仕方や分かりやすい書き方についての講義を受けた後、自分たちで調べた津和野町についての内容を投稿することを試みる。

４　放課後デジタル講座の実施

日時：令和７年２月１２日（水）　１６：００～１７：００

参加者：本校生徒１０名、教員等４名

株式会社 Nex-E の大庭成晴氏を講師として招き、本校敷地内にある町営塾 HAN-KOH を会場として実施した。動画市場の現状や動画作成の手順や注意点についての説明を受けた後、自分の端末を用いて Clipchamp を使った動画作成を実践した。動画作成に必要となる音源の探し方なども教えていただき、自分が持っている動画や写真を素材とした動画を参加者は作成していた。制作に使える時間は多くなかったが、参加者は時間内に動画を作り上げていた。この講座をきっかけとして、今後も大庭氏を招き定期的にデジタル講座を開催したい。

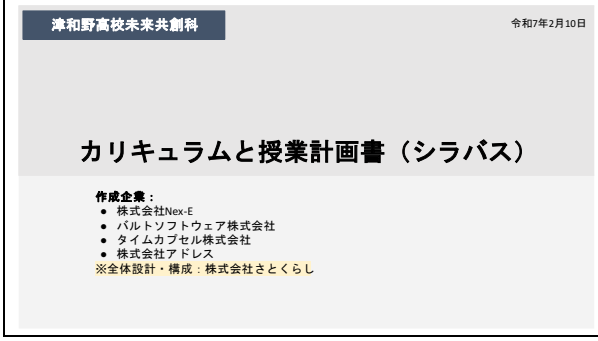
【デジタル講座案内チラシ】

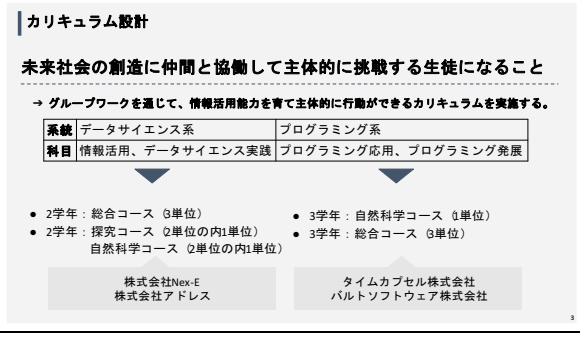
【講座の様子】

５　学校設定科目教材の作成

本校担当教員と運営指導委員である桜井里子氏を中心に、学校設定科目について内容を具体化していった。第２回運営指導委員会にて各科目の概要と連携する授業の単元について内容の大枠を審議し、連携する授業の単元について、詳細や担当企業について以下の資料のように決定した。

【カリキュラムの概要】





【各単元の構成の概要】

年間スケジュールと担当分け：データサイエンス系

2学年：総合コース（3単位）105コマ

情報セキュリティとAI活用 （事例を用いた問題点整理）	5コマ	株式会社アドレス	情報社会の基本：著作権について / アプリ等の利用承諾書の読み方 AIの活用：機械学習モデルの処理について / ChatGPTやFireflyの使い方
プレゼンテーションとデータ活用 （ツールの使い方・データの見方）	20コマ	株式会社アドレス	プレゼンテーションの基本：ストーリー設計とツールの紹介 データ活用：表計算・関数 / RESUS等のオープンデータの扱い方
地域についての課題発見演習① （津和野高校Webサイト改善）	24コマ	株式会社Nex-E	津和野高校WebサイトのGoogleアナリティクス分析 / 問い合わせ（入学希望者）を増やすための改善施策の提案、サイト改修による効果検証
地域についての課題発見演習② （関係人口創出のための施策）	24コマ	株式会社アドレス	多拠点居住プラットフォーム『ADDress』の実際の業務データ（マーケティングツール）を活用した課題整理、施策の検討と実行、効果検証
オープンカンパニー	8コマ	株式会社Nex-E 株式会社アドレス	企業訪問および業務実習
地域課題の発見と新規プロダクト提案 （オリジナルテーマの研究・発表）	24コマ	株式会社Nex-E	グループごとにデータを活用した地域課題テーマの選定、新規プロダクト提案（ビジネスプラン）の発表

年間スケジュールと担当分け：データサイエンス系

2学年：探究コース（1単位）35コマ

※2学年：自然科学コースも同様

情報セキュリティとAI活用 （事例を用いた問題点整理）	5コマ	株式会社アドレス	情報社会の基本：著作権について / アプリ等の利用承諾書の読み方 AIの活用：機械学習モデルの処理について / ChatGPTやFireflyの使い方
プレゼンテーションとデータ活用 （ツールの使い方・データの見方）	10コマ	株式会社アドレス	プレゼンテーションの基本：ストーリー設計とツールの紹介 データ活用：表計算・関数 / RESUS等のオープンデータの扱い方
地域課題の発見と新規プロダクト提案 （オリジナルテーマの研究・発表）	20コマ	株式会社Nex-E	グループごとにデータを活用した地域課題テーマの選定、新規プロダクト提案（ビジネスプラン）の発表

年間スケジュールと担当分け：プログラミング系

3学年：総合コース（3単位）70コマ

スマホプログラミング （オリジナルアプリ開発）	30コマ	タイムカプセル株式会社	プログラミングの基礎講座：パソコンを使ってスマートフォン向けのアプリケーションを開発
Webプログラミング （オリジナルアプリ開発）	40コマ	タイムカプセル株式会社	実践的なアプリケーション講座：Google Apps Scriptを使ったプログラミングで、日常生活で役立つDXアプリケーションの開発

年間スケジュールと担当分け：プログラミング系

3学年：自然科学コース（1単位）25コマ

Python入門 （プログラミング演習）	10コマ	バルトソフトウェア株式会社	Pythonの基礎知識習得：基本概要の習得から応用力を高めるミニプロジェクトの実践まで
Python応用 （機械学習モデルの推進）	15コマ	バルトソフトウェア株式会社	人工知能技術の基礎となる機械学習について、Pythonのライブラリを使用した簡単な実装と検証まで

６　「情報Ⅰ」における連携

産業振興課の協力のもと、令和７年度より「情報Ⅰ」において、企業の方を講師として出前講座を数回行うこととした。背景としては教科書等で学習した内容が、企業現場において実際どのように活用されているかを知ることで、生徒の学習意欲や IT の仕事についての関心を高めたいという情報担当者からの要望があった。以下の５領域において一通り学習を終えた後、企業の方に現場での活用について教えていただくこととした。

【企業の方に入っていただく分野】

１　情報デザイン

（ホームページなどのデザイン作成をどのように行うか）

２　プログラミング

（Python を使ったプログラミングを用いて、実際に何かを動かしたり作ったりといった実践的演習）

３　シミュレーション

（企業でのモデル化、シミュレーションによる問題解決の仕方）

４　ネットワーク

（どのようにネットワークとつながっているか）

５　セキュリティ

（暗号化の実際や安全に情報機器を使う方法）

vi　新学科の広報活動についての取組

１　新学科設置の目的

年度当初、本校 PTA、近隣中学校、津和野町に対して、津和野高校の特色ある学校づくりに向けて、今年度は『新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業)』、『高等学校 DX 加速化推進事業』の２つの事業に取り組んでいくことを松田校長が報告した。予測不能な新しい時代に対応した教育を実践するために、これまで津和野高校のカリキュラムで大切にしてきた「教科学習」と「探究学習」に「情報活用」を加えることで、「教科学習」と「探究学習」の深化を図り、さらに課題発見力、課題解決力、粘り強さ等、生徒が今後の社会で生きていく上で必要な力の育成を目指した先進的な学びを提供する、と説明した。

会議名	日時	場所	対象
PTA 常任委員会	4 月 26 日（金） 18:00～19:00	津和野高校	PTA 常任委員（１３名）
PTA 総会	5 月 11 日（土） 14:00～15:00	津和野高校	全学年保護者、津和野高校教職員
中高連絡会	5 月 15 日（水） 14:30～15:20	津和野高校	近隣中学校の教職員
水曜会	5 月 22 日（水）	町民センター	津和野町内の各団体の長

（PTA 総会の様子）

２　新学科の特色や学習内容

（１）リーフレットの作成

新学科の特色及び学習内容を伝えるため、教務部が広報用のリーフレットを作成した。５月中旬以降の学校説明会等では、このリーフレットを使用して新学科の内容説明を行うこととした。取り上げた内容は、以下の３点である。

・新学科での目標：デジタル思考や IT 機器を利用して、課題発見と解決に粘り強く取り組む人材育成

・津和野高校のカリキュラム：３つのコースでそれぞれ新しい学校設定科目を設置

・よくある質問：入試や進路への影響、デジタル活用の必然性等

（２）生徒募集イベントでの説明

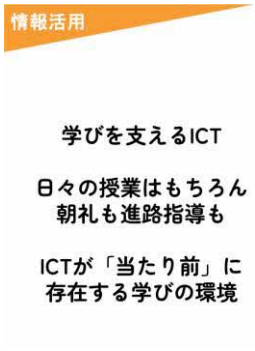
さらに、生徒募集の説明会で行う新学科の説明をどの程度行うのか、管理職、教務部、改革推進部、高校魅力化コーディネーターで検討した。普通科の枠組みの中で「情報活用」を取り入れる姿勢を理解してもらうため、以下の３点を説明することとした。

・「教科学習」「探究学習」「情報活用」の３つが津和野高校での学びの柱となる。

・これまでのカリキュラムとの変更点：新学科での変更は、ほぼ学校設定科目のみ。

・デジタルスキルは現代の生活において不可欠なものとなりつつあり、一部の生徒だけでなくすべての生徒にとって学ぶ価値がある。

中学生に「情報活用」の具体例を知ってもらうため、宣伝用の動画作成を年度当初は検討していたが実現に至らず、日原中学校では卒業生が高校の「総合的な探究の時間」の授業で作成した動画を流すなどの工夫を行った。



（説明会用スライド）

（日原中学校での学校説明会：生徒作成の動画）

① 近隣中学校での説明会

校長、主幹教諭、教務主任、進路指導主事、高校魅力化コーディネーターが中学校に出向き、主に中学校３年生に対して説明した。

（対象：中学生・保護者・中学校教員）

会場	日時
津和野中学校	6 月 11 日(火)　8:50～ 9:15
瑞穂中学校	6 月 12 日(水)　12:05～12:30
益田中学校	6 月 12 日(水)　14:05～14:30
高津中学校	6 月 13 日(木)　9:25～ 9:45
東陽中学校	6 月 14 日(金)　11:10～11:30
浜田東中学校	6 月 19 日(水)　11:40～12:00
横田中学校	6 月 20 日(木)　10:45～11:05
日原中学校	6 月 21 日(金)　9:45～10:10
益田東中学校	6 月 25 日(火)　10:40～11:00
中西中学校（小野中学校と合同）	6 月 25 日(火)　9:35～ 9:55
美都中学校	6 月 28 日(金)　11:15～11:35
吉賀町内３中学校 （柿木中学校、吉賀中学校、六日市中学校）	7 月 4 日(木)　15:00～15:20

②一般財団法人「つわの学びみらい」評議員会

（対象：評議員、理事、事務局長計９名）　6 月 17 日(月)

③地域みらい留学、しまね留学合同説明会

校長、主幹教諭、高校魅力化コーディネーターが東京、大阪に出向き、県外の中学生及びその保護者に対して説明した。

日時	説明会	場所	参加者（組）
6月29日(土) 6月30日(日)	10:00～17:00 地域みらい留学合同説明会	地域みらい留学東京 @流通センター	29
7月20日(土) 7月21日(日)	10:00～17:00 しまね留学合同説明会	地域みらい留学大阪 @フクラシア大阪ベイ	30
8月24日(土) 8月25日(日)	地域みらい留学合同説明会	地域みらい留学東京 @代々木オリンピックセンター	31

新学科設置にあたり、５教科の学習が削られるではないかと質問があり、学校設定科目が情報活用の内容に変わるので、心配ないことを伝えた。

④地域みらい留学オンライン説明会

平日夜、または休日に他の地域みらい留学参画校と一緒に学校説明を行った。

日程	分類とテーマ	参加予約人数
5月28日(火)	テーマ別オンライン合同学校説明会 「地域との交流が盛んな学校」	21
6月1日(土)	地域みらい留学オンライン個別説明会①	2
	地域みらい留学オンライン個別説明会②	6
6月21日(金)	テーマ別オンライン合同学校説明会 「緑豊かな地域（山の近く）の学校」	10
7月7日(日)	地域みらい留学オンライン個別説明会①	4
	地域みらい留学オンライン個別説明会②	5
	地域みらい留学オンライン個別説明会③	6
7月24日(水)	テーマ別オンライン合同学校説明会　「寮生活の学校」	14
8月3日(土)	地域みらい留学オンライン個別説明会①	4
	地域みらい留学オンライン個別説明会②	3
	地域みらい留学オンライン個別説明会③	1
8月29日(木)	テーマ別オンライン合同学校説明会「探究的な学びの学校」	8
9月30日(月)	テーマ別オンライン合同学校説明会 「めずらしい特長のある学科の学校」	27
10月28日(月)	テーマ別オンライン合同学校説明会　「普通科の学校」	7

⑤しまね留学バスツアー

7 月 24 日　津和野高校　対象：県外の中学生及びその保護者（14 組）

⑥第１回オープンスクール

7 月 29 日　津和野高校　対象：中学生（127 名参加）

⑤、⑥では、校長が、次年度のグランドデザインについて説明した。また、⑥では、「情報活用」の授業の具体的なイメージがつかめるよう、今年度２年生で実施している「産業社会と人間」の授業を実施した。

（⑤⑥説明用スライド）

（⑥「産業社会と人間」体験授業の様子）

３　津和野町内及び津和野町東京事務所での説明会

町内と東京での新規の説明会を企画し、学校ホームページ、さらに町内ではケーブルテレビや公民館、東京向けには地域みらい留学のホームページで参加を呼び掛けた。校長及び高校魅力化コーディネーターが説明した。

日時	説明会	場所	参加者
8月2日(金)	地元向け追加説明会	滝元枕瀬公民館	中学生の保護者２名
8月4日(日)	ふらっとトーク	津和野町東京事務所	２組
8月5日(月)	ふらっとトーク	津和野町東京事務所	２組
8月7日(水)	地元向け追加説明会	津和野高校	町民（町議員）１名

参加者より、「情報活用」が重視されることで、従来の本を読んだり、紙に書いたりなどの学習活動が疎かになるのではないか、との意見があった。これまでの教育を否定するものではなく、「教科学習」「探究学習」の底上げを図るものであることを伝えた。また、津和野高校はこの１０年余りで魅力化を進め、教育活動の内容はかなり変わったが、地域の方の間では、以前の「進学に向けて勉強する普通校」というイメージがあることが分かった。教育改革を進めながら、地域により開かれた学校にするためにも、地域での説明は今後も必要だと感じたが、参加者が少ないため、次年度以降は、公民館での会合の中で津和野高校の紹介をするような機会を、財団と公民館の協力を得ながら作りたい。東京での説明会は、引き続き津和野町と連携し進めたい。

４　新学科設置確定後

９月１２日に、本校ホームページで新学科設置の報告を行った。

①第２回オープンスクール

日時：10 月 4 日（土）　　会場：津和野高校　　対象：中学生５５名

校長が次年度のグランドデザインに加え、新学科名の紹介及び説明を行った。

（説明会用スライド）

②個別説明会

７月から１２月の間に、計１４組の島根県内外の中学生及びその保護者の訪問があり、主幹教諭が学校説明を行った。

まとめ

新学科に関して、中学生からの質問はあまりみられなかった。すでに義務教育でも ICT の活用が広まっているため、中学生は抵抗なく受け止めている様子だった。保護者及び地域の方から指摘された、他教科の時間数への影響、従来の学習方法とデジタルの併用等については今後も丁寧に説明を継続する必要がある。そして、今後詳細を決定する新学科での学校設定科目の内容について、できる限り具体的な情報発信を行い、「未来共創科」での学びに興味関心を持ってくれる小中学生を増やしたい。

vii　他校等との連携についての取組

普通科改革を進めるために、以下のような連携交渉等を行った。

１　東京都立三鷹中等教育学校

日時：９月２７日（金）１０：００～１２：００
【参加者（敬称略)】

所属	役職	氏名
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	コーディネーター	宮　本　善　行

目的：DX ハイスクール指定校として情報、数学等の教育を重視している三鷹中等教育学校の取り組みについてお話を伺い、本校の取り組みに生かす。

情報教室（メディアラボ）の生徒利用について

情報機器（ハイスペック PC、デジタルカメラ、カメラ用三脚、キーボード、プロジェクター、カラープリンタ）について、生徒は自由に使用することができる。特に高性能 PC については課題の作成、探究活動などに使用している。貸し出し等の機器管理などは生徒自身に任せている。高性能 PC などの購入については、よりよい環境を整えることで生徒らが意欲的に機器に触れ、活動に取り組むことができるとのことだった。

２　鹿児島県立種子島中央高等学校

日時：１０月１日（火）１０：００～１６：００
【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
株式会社さとくらし	代表取締役	桜　井　里　子
タイムカプセル株式会社	代表取締役	相　澤　謙一郎
株式会社 Nex-E	代表取締役	小　林　達　司
	取締役	熊　田　洋　子
バルトソフトウェア株式会社	シニアソフトエンジニア	大　石　和　也
津和野町つわの暮らし推進課	企業誘致担当	豊　田　悠　策
津和野町教育委員会	次長補佐	楠　　寛
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	コーディネーター	宮　本　善　行

種子島中央高校の概要

　種子島中央高校の生徒は令和６年度１９９名　令和５年度までは普通科２クラス情報処理科１クラスの３クラス。今年度から普通科１クラスをミライデザイン科として改変した。実際に高校に入学している生徒はほとんどが島内からの生徒である。

改革の内容

　令和 5 年度より、従来の普通科 2 クラス、情報処理科 1 クラスから、普通科 1 クラスを「ミライデザイン科」に改変した。ミライデザイン科では、地域社会の課題解決能力を備えた人材育成を目指し、プログラミング、デザイン思考、探究学習など、実践的な学びを通して、生徒が自ら課題を発見し、解決策を提案できる力を養うことを目的としている。

現状の取り組み

・新しい学び：従来の教科学習に加え、学校設定科目 DX（１年次 2 単位、2 年次 2 単位、3 年次 3 単位）の 1 年次では、デザイン思考やデジタル技術といった「新しい学び」を取り入れ、創造性や問題解決能力を養う。具体的には、共感、定義、アイデア出し、プロトタイプ作成、検証という一連のプロセスを体験することで、課題解決のスキルを習得する。2 年次以降は、1 年生で学んだデザイン思考を基盤に、より実践的な地域課題解決に取り組む。地域住民の方々とのインタビューやフィールドワーク

を通して、地域の抱える課題を深く理解し、その解決策をビジネスプランとして具体化し、高校生ビジネスプランコンテストなどへの出場を考えている。
・地域の IT 企業との連携:地元の IT 企業のエンジニアを招いてワークショップを開催し、AI や IoT の先端技術に触れ基礎知識を学ぶ。

成果と課題

　ミライデザイン科では、家庭科と情報の教員が共同で授業を行っている、また地域 IT 企業による先端技術講義を実施するなど、生徒の主体的な学びを促進するための取り組みが活発に行われていた。一方教員からは、生徒の成果物をどのように評価するかという点で、新たな課題が浮上しているとの報告を受けた。

３　株式会社 Village AI

日時：１０月２日（水）１１：００～１２：００
【参加者は２と同じ】

内容：種子島中央高校の普通科改革に関わっている地元 IT 企業の方から、普通科改革に関わっていく中での、学校とのかかわり方や、課題などについてお話を伺った。

種子島中央高校との連携について

　高校で行う授業について、事前の打ち合わせなどは高校 CN とのやり取りが主であること、授業評価については高校側が行っていること、また、カリキュラムについて、先端技術に触れてみることとしているが、内容についてはその時代に合ったものを取り入れるため流動的であることを伺った。

今後の課題

授業準備についてはほとんど時間を使っていない、学校側からの予算では自身の仕事とのバランスが悪く、授業準備については時間をかけないようにしているとのことだった。また、改革事業終了後の予算について、どのように捻出するのかについて、「健全な予算」を考えていく必要があると伺った。

４　関東第一高等学校

日時：２月５日（水）１０：００～１２：００
【参加者（敬称略）】

所属	役職	氏名
津和野高等学校	普通科改革担当	山　根　幸　久
	普通科改革担当	田　原　義　崇
	コーディネーター	宮　本　善　行

目的：DX ハイスクール指定校としてプログラミングを用いた AI 活用や、探究活動へのデータの活用を積極的に行っておられる取り組みについてお話を伺い、本校の情報活用や探究活動の取り組みに生かす。

プログラミングと AI の活用について

１年次の情報Ｉの授業において、教員が用意したプログラムを活用して実際にデータ分析をする体験をし、プログラミングでどのようなことができるかについて生徒に認識させるように取り組まれていた。その上で、２年次の理系コースの生徒を中心に、実際にプログラムを書かせて AI を活用し、自分の探究活動のためにデータ分析を取り組ませておられた。生徒の探究活動の成果を用いて各種コンテストへの参加を促しておられた。

【連携交渉等を元にした今後の本校の取り組み】

・生徒がデジタル機器を自由に利用できる空間を設ける。
・協力企業の方へ支払うための予算について検討する。
・校内における新学科準備の機運を盛り上げる。
・各機関との円滑な連携ができるような組織を検討する。
・データ分析など、AI を用いた教育活動を推進する。